明治廿六年九月廿四日發行

女鑑

第四十七號

東京國光社

女鑑第四十七號目次

前田利家の室

奥村永福の妻



女鑑 第四十七號

女鑑

史學と文學

國を愛するとは、情に於いて、其の國と棄て難きところあるより發するものにて、即、自家の歴史を顧み、自國の山河を愛するより生ずるもの、及、意思よりするものにて、即、道義の上より、國を愛するもの、單に、感情よりするにあらずして、意思よりするものなり。

婦人は、意思の力に弱きも、感情の力の強きものなり。故に、物の判斷、即、事の急に臨み、懼れず、惑はざるが如きは、女子の短處なれども、水火を顧みず、死生を顧みずして、只、一心に、其の感情の驅馳するまに〳〵、其の進み行く先

を測らざるものは、婦人の長處なり。

夫、感情なるものは、其の平時にありては、藹然として、春の如くなるべく、其の、一旦、變時に際しては、即、凛然として、秋の如くなるべし。春の如きと、秋の如きとは、互に、相矛盾するが如しと雖、人情は、兩端に動くものにして、而して、兩間、決して、衝突するものにあらざるなり。和易歡樂は、人生の、最望むところなれども、又、凛然端毅して、紛糾を解くが如きも、又、人の快とするところなり。

されば、婦人たるものは、固より、意思の修養を要すと雖、其の長處を用ゐる點よりして、又、其の情に於いて、國を愛することを要するなり。其の方たるや、婦人たるもの、勉めて、自國の歴史に通ずるに在り。文學を修むるに在り。

歴史は、人をして、この國を重んずる念を發せしむ。今、一片の骨董ありて、其の實は、價値なきものなるも、先祖が、何々の役に使用したるものなりとか、又は、何々公より賜はりたるものなりとか、歴史的の關係あるときは、頓に、之を珍重する心を生ぜしむ。國も、亦然り。凡、人たるもの、假令、血は、杵を漂はすとも、屍は、山を築くとも、この國を千萬歳に保守せざるべからずといふものは、この國は、一朝、偶然に得たるものにあらずして、幾千萬歳の久しきより、皇祖、皇宗の御經營と、忠勇なる臣民の働とによりて、以て、今日に傳へ來れるものなれば、かゝる愛でたき國体は、決して、一朝に、其の金甌に缺を生ぜしむべからざればなり。此の如き觀念は、皆、歴史を愛するより生ずるものにして、感情的愛國の粹なり。

又、文學思想なければ、以て、この感情的愛國の念を盛ならしむるに足らず。第一、歷史を咏歌すること、第二、山河自然の美景を咏歌すること、これ、又、文學の骨子にあらずや。而して、此の如きは、實に、愛國の義にかゝるところ、甚大にして、極めて多し。

故に、吾人は、世の淑女たるもの、專、史學、文學の二に、力を効されんことを希望して止まざるなり。彼の羅馬の婦人は、其の歷史と文學の感情を以て、今に、世界に誇るにあらずや。

論說

女學生の行方

長井行

中等科以上の女學校の數や多し。年々の卒業生も、亦少しとせず。嗚呼、彼等は、今、安くにか在る。

女人を待遇する有樣の、幾分か、從前に比して、勝るものあるは事實なり。去かも、これ、女子の力量、品性、よく、之を致したるか。抑、男子の德義、昻騰の餘幸なるか。吾人は、猶豫なく、後者なりといはん。

去かれども、又憶ふ。男子の德義心は、然程までに、女子を尊重する地位にまで昇り得たりとは、少しく虛搆らしからざるを得ず。畢竟するに、これ、又、歐洲の風俗より、影響し來れる餘慶のみ。

チヤーレス、ヲムは、其の『十九世紀に於ける女子の禮遇』といへる文に於いて、如何にいへるか。彼の國にして、尚、彼がいふところの如し。女子たるもの、禮

遇せらるゝが如しと雖、是、特に、皮相のみ。表面のみ。假装のみ。所謂、優にやさしき風雅男が、汚らはしき溝上に於いて、怪し氣なる賣菓婆の、荷車に觸れて覆じたる菓實を、積み上ぐるを助くるを、敢てするが如き時代は、倘々、遼遠なりといふべし。

鳴呼、彼の美目眄たり、巧笑倩たる、才貌双美の女學士、今、去りて、安くにか在る。今、果して、何事をなしつゝあるか。日本女子の地位を高むべきものは、諸孃の任に非ずや。而して、諸孃にして爲すなくんは、遂に、女子の地位を奈何せんとす。

ナヤンニングはいへりき。大統領といふより、一個の人といふことの價値こそ重けれと。名かり。一個の人といふ價値は、誠に、此の如くに、貴重なるもの

なり。この一個の人といへる價値、確立してこそ、始めて、大統領として、國務大臣として、將、教師として、記者として、尊ぶべき價値を并せ得べけれ。ナポレヲン帝は、帝者として、英雄たりと雖、一個の人としての力量は如何。この疑問を推して、之を見る。今の教育(男生も無論)の誤れること歴々、男生、已にかかり。況、女子をや。女子たるもの、一個の人としての天分を見出だして、よく、自己の天職を覺知するものあるか。

世人、口を開けば、云はく、富國强兵と。殖産興業と。然れども、富國强兵以外、殖産興業以上、豈、人間の職分、先務なからんや。況、これ等の實利主義は、女子をも、其の狂波中に捲き去らんとするは何事ぞ。

眞理を發見するも、英雄なり。眞理を吟咏するも、英雄なり。人は、兎角、廸惠

の二字を以て、最上の天職となすのみ。しかれば、吾人が、世の女子に望むところは、彼のゴエテが傑作、フオースト中の、マルガレツトの如きものを理想せんことに在り。知らずや。一人を迷の中に救ふ功は、一天下を征服する功よりも、大にして不朽なるを。紛たる俗界、何ぞ、首を九天の外に擡げざる。讀書孃、今、安くに在る。吾人は、廣く、社會とはいはず。諸孃、請ふ。近く、徳を、家庭の上に立てよ。

女子要言　第二篇（十八）

三輪田眞佐子

古代の衣服は、筒袖にして、褌を用ゐしが、其の后、韓風に變じ、其の后、亦、唐風に擬せし等、種々の變遷を經て、遂に、今日の風體をなせり。就中、方今の

服は、簡便にして、優美なりと信ずべければ、矢張、上流女子は、紋附の重衣を用ゐ、以下分限に隨ひて、日本の常習に由るべし。目下、洋服、稍行はれつゝあるも、這は、全く、我が國の女子に適せずと云ふべし。何となれば、彼等は、身の長高く、腰細ければ、隨分、美なりと雖、我が邦女子は、倭にして太し。加之、家屋の制度も異なればなり。帶の如きも、昔は、六尺五寸が通常なりしが、近世、乃、靈元帝の末年頃より、一丈二三尺の物を用ゐ、且、幅も廣くなりしものにて、古代の風俗と言ふべからざるも、日本女子の姿勢を飾るには、是非、斯の如きものならざるべからず。若、狹帶主張論者の、洋僻心以て望むまゝ、男子同樣のものを用ゐんか。彼の細帶のみを結ぶ下婢の醜き樣にも似ん。然れば、斯る論者は、扶桑優美の女子を率ゐて、下婢の樣に化せんとする乎。其の結び樣も、高尙に

して、古風なるに勝るものなし。彼の帯揚の大なるは、洒落に似て、而して、全く、其を用ゐざるは、亦、堕落めきたり。抑、中庸てふ教は、普通なるかな。蓋、昨今は、青年女子も、洋服を用ゐるもの少く、衣帯共に、奇様を好む心、薄くなりしが如し。獨、増長して止まざるは、舶來の品を用ゐるとともに、華奢の風となり、昔、支那に、馮外郎の妻、馮球を以て、首飾とす。王涯、歎じて曰はく、馮は郎吏なり。妻の首飾七十萬錢。其、久しかるべけんやと。吾は、王涯の如き人、多く、我が國になきを怨む。

其の色に至りては、卑俗なるものと、雅致なるものとを區別すべし。而して、凡て、五色の中は、何れとも、純色にして、正しきものなり。而して、其の餘は、雜色なり。故に、正服には、必、白、亦は、黑等、五色の中のものを撰らぶを

雖、其の人目を愕かしむるものは、華美に近ければ、黒色を、最良しと云ふ。紫の如き間色は、貴族社會には、用ゐること多し。然れども、正服としては、决して用ゐず。此等の理を應用して、女子は、其の品位に從ひて、各、日常の衣服にも、適當の色を撰らぶべし。極上流の女子は、古今、殆、華美に近きものを用ゐると雖、這は、其の身分に應じて、反りて、然すべき理由あるなり。一般の女子は、服色は勿論、縞柄も、質素高尚なるものを採るべし。

終に臨みて、一言すべきは、佳人の資格に關する要素なり。夫、佳人は、第一、女德、智量、品格、及、女藝等を備へ、第二、頭髮、眉毛、眼色、體制、身丈、筋肉、及、姿勢等、各、其の宜を得、第三、裝飾は、適度を失はざるものならざるべからず。然れども、斯く、心は、玉に似て、容は、花に勝り、裝は、之に

適ふことは、萬人に願ふべく、而して、一人にさへ期すべからず。されば、其の數件の中、全數を得るに近き女子を、佳人なりと判定することの止を得ざるなり。然れども、佳人たる資格の眞髓は、心なり。是、人は、頑然たる土石と異なれば、心情、何となく、外貌に顯るゝものなれば、心清く、且秀でたる女子は、人をして、覺えず、上品なりと譽め、柔和なりと唱へしめ、自然に、美なりと思はしむるに至るべし。蓋、人の美は、物の美と異なる所以ならん。世、外貌の美を以て、佳人なりと誤るものあり。若、果して、心實と外相と、相關連するなくんば、焉ぞ、外貌醜きものにして、彼の婦女は、非凡なり、優美なりと、一面識の人をして、感歎せしむることあらんや。故に、徒に、女子の美醜は、外貌のみに由ると信じ、內心を研かずして、外樣ばかりを形つくらんとするは、愚なり。

否、外面の美は、天なり。天を改めんとするは、人の爲し得る望ならんや。昔、西施なる美人あり。顰蹙の癖あり。偶、之を羨む女子、之に擬して、世の笑を招きしことありしとかや。希はくば、天下の女子、一人たりとも、斯る野念を懐かず、外貌の美醜に拘らず、先、内心の上達高尚を謀らば、内外兩ながら、美なるものには及ばずと雖、亦、一種の佳人たること、難きにあらず。吁、豈、天は、外貌を以て、内心を棄てんや。

其の五　女子人に接する法

孤立するは、人の性なるか。獨存するは、人の分なるか。否、人は、社會的の靈物なり。故に、何れの國も、原世時代より、既に、人は、此の濱に一人住み、彼の山に一族居る如き、分離の生存をなし、ものにあらずして、必、河邊、及、海

岸等、最、生活に便利なる所を撰らび、諸族群居したりけんと推知するに足る證跡は、各、其の國史を繙けば、明なり。既に、人の稟性、斯の如くなれば、人、相集まらば、便益多く、相交はらば、快味多かるべし。若、孤立せんか、病苦するも、互に助くる能はず。水火に逢ふも、互に救ふ能はずっ止むことを得ずんば、あはれ、人は、恐怖と憤悶の間に、一生を送ることを免れず。玆に於いてか、人には、交際の必要なるを知る。孟子も曰はく、獨樂する樂は、人と樂する樂に若かず。少と樂する樂は、衆と樂する樂に若かずと。是、人の、本然の性德を寫すものなり。故に、交際は、緩急相應じ、需用相給する利益あるのみならず、櫻花の朝、明月の夕、交、感應を相通じ、平和を相溫め、以て、所謂、人類の人類たる趣味を含む生存を、全うするに欠くべからざる德義の一種なり。

交際は、斯の如く、人々、互に、懇親を通じ、以て、相益し、相樂しむものなりせば、老若男女の區別なく、普通の人道なりと雖、就中、冬日の如き温和、春風の如き柔和の天稟を受けし女子は、其の天職の一と思はざるべけんや。否、女子は、繁鬧にして、其の體力の要する事業をば、男子に譲るとせば、是非、女子に適合する交際の如きは、己の任務とするは、當然ならずや。否、今日の女子は、人に接することを避けんとするも、避くる能はざるなり。既に、避くる能はずとせば、亦、其の法を講ぜざるべからず。

史談

前田利家の夫人の傳 附奥村永福の妻

竹野節雄

前田利家の夫人高畠氏は、左京大夫某の女なり。天性怜悧にして、勇氣人にすぐれ、機に應じ、變に處して、少しも動かぬ魂、大丈夫も耻づるばかりなりき。戰國の世の常として、昨日の味方も、明日は、敵となり、朝に、席を同じくして、盃を廻らしゝ朋も、夕には、弓矢を取り、勝敗を、戰場に爭ふあさましき習にもれず、天正十二年、織田信孝も、遂に、豊臣秀吉と不和を生じ、兵を構ふるに至りしかば、列國の諸侯も、各、其の志す方に馳せ集りぬ。時に、越中國富山の城主佐々成政は、信孝に、加賀國金澤の城主前田利家は、秀吉に、心を寄せ居たりしが、成政つくづく思ふやう、此の機に乘じて、彼の末森の城を打取りたらんには、能登一國は、即日に、我が手に歸すべしと、直に、心を決し、同年九月、兵一万五千を率ゐて來り攻む。

前田利家は、智勇兼ね備へたる人なりければ、かゝる事もやあらむと、豫め思ひはかり、能登國末森に、城を築き、其の侍大將奧村助右衛門永福をして、之を守らしめぬ。されども、版築の功、未成らざるに、ゆくりなくも、成政、大兵を以て、攻め寄せたりければ、永福の驚き大方ならず。城兵、僅に三百を以て、死力を出だし、

拒ぎ戰ひたれども、衆寡、敵すべきにあらず。且、成政の、虎勇を振ひ、兵を勵ましゝかバ、外城、忽に敗れ、如何ともすること能はざるに至る。永福、今は、是迄なり。潔く自害して、節を全くするには如かずと、彌決心してありけり。

然るに妻の加藤氏は、容貌美しく、勇氣、をさ〱、夫にも劣らざりけるが、かひがひしく、小袖をかいどり、鉢巻をし、長刀を横たへ、多くの粥を煮て、戰ひ疲れたる士卒どもに與へ、自いたはりて云へるやう、昔、楠とやらん云ふ大將は、日本全國を、敵に受けて、籠城したりと聞く。今、僅に、越中一國の兵に攻められたりとて、何でう懼るゝ事かあらむ。まして、明日は、金澤より、必、後詰の兵來るべし。唯、こよひ一夜なり。拒ぎえずして叶ふべしやと、打廻り〱勵ましけれど、永福、之を見て、大に耻ぢらひ、今日の妻の振舞は、男子に勝れり。女の力にて、此の城を持ちこたへられんは、如何にも口惜しき事なりとて、是より、再、勇氣を振り興し、士卒を指揮して、拒ぎ戰へり。

金澤の城には、斯る事とも、夢にも知らざりしに、其の日の酉の刻に、末森城より、急使來りて、事の由を告げたりければ、利家、大に驚き、直に令して曰はく、兵は

機敏を貴ぶ。今夜の事、敵の不意を打つに利あり。軍卒を揃ふるに及ばず。一騎駈けに打出でよ。一足も、速かなるを以て、功とすべし。士卒どもは、速に、汁を掛けて、飯を喰へと。又、富田余五郎を召して、汝は、津幡に行きて、不破彦三に、末森の後巻せよと傳ふべしと云ひつゝ、物具する間に、黒く逞しき馬を庭上に引き居ゑたり。

利家の夫人は、斯る急難に臨みても、聊か驚く色なく、三方に熨斗を載せ、銚子を携へ、静に出で來り、夫の側に坐し、之を侑めて曰はく、若、末森陷らば、こよなき恥辱なり。宜しく、君も打死にせさせ給ふべし。妾も、敵の爲に辱しめらるゝことをせず、報至らば、直に自刃して、之に殉すべしと。又、衆に向ひて曰はく、御身等、能く努められよ。今夜の戰は、我が家の安危の決する所なり。若、敵に勝つことを得ずば、進みて、戰死すべし。生きて還ることなかれと。利家、大に悦び、盃を擧げつゝ、をゝしきかな、妻の言。成政の首、打取らんは、瞬く間にあり、と云ひすてゝ、馬に鞭ちて馳け出でければ、之に從ふ兵、僅に百余人なりき。かくて、漸く、明方になりて、末森に達し、樣子を覘へば、已に、二の丸三の丸を乘り取られ、

城兵、殆ど死地に陥りしかど、直ちに奮撃して、大に、之を破り、遂に、成政を追ひ還しぬ。あはれ、利家の夫人、永福の妻、此の時にあらざらんには、或は、成政の爲に蹂躙せられたらんも計りがたし。主從に、此の烈婦を見る、誠にたぐひまれなりと云ふべし。夫人は、後、剃髪して、芳春院と號せしが、子利長、石田三成の爲に讒せられ、家康の疑を受けしにより、江戸に詣りて、其の他なきを證せしを以て、利長は、遂に其の封土を全くすることを得たり。

小澤松が事

秋里豊成

靈元天皇の御代、延寶年中の頃とかや、武藏國利根川の邊に住みける小澤某といふ人、松といふ女を持ちたり、貌すぐれ、心おとなしかりしが、十七の歳、同じ邊の野口某と云ふ人に娶せり、まつ、夫に仕へて、うや／＼しきのみならず、舅姑に事へて孝行なり、然るに、野口の父母身まかりし後、夫不幸にも癩病に罹りけり、松、これを深く歎き、神に祈り、佛に念じ、藥を用ゐて、さま／＼治療を盡せども、少かの驗もなく、次第に重りて、指屈まり、足なえて動くことかなはず、床にのみ起臥

したり、松、もし、色にめで、寶を好む類の女ならむには、なにか、これを顧みん、さるを、松は、たゞ、夫の病重く、人にもかずまへられざることをのみ悲しみ、我が身のことを、露ばかりも思はず、朝夕に、夫の爲、病をかへりみしこと、慈母の幼兒を養ふが如し、そのはじめ、壯健なりし時は、人にもかぞへられ、家も廣く、田畑も多く、いと豐に暮らしゝが、夫、この病をうけてよりは、高きも賤しきも、見ることをすら穢はしとすれば、日頃睦ましかりし友も尋ね來ず、親しきゆかりの者も音信せず、まして、うときは有りぞともしらず、召使ひし奴僕等も、病を嫌ひて逃げ亡せなどしければ、いかにとも爲む方なく、松一人のみ、夫をはぐゝめり、かかれど、病をうけてより、業を營むこともなり難く、ある程の田畑を賣り、小袖の類を、糧の代として、月日を送りしが、それも久しくはつゞかず、後には、家をも賣りたれば、住むべき便宜もなくて、利根川の寒き河風に吹かれ、嵐にもまるゝ呉竹を折りかけて、峯の木の葉、麓の野邊の草を結び、やう〳〵庵をしつらひて、夫婦、小篠の露に袖をぬらし、涙の雫は、川の水と流れ、泣く〳〵も、夫をなんかへりみし、家をも賣りて後は、世渡るたつきもわらざれど、松は、自ならはざる荒布

の衣に、縄の帯して、襷といふものをかけ、川向の里へ、日毎に通ひ、米ふるひ、水いたゞき、ならはぬ業に身をやつし、一日の勞を錢にかへて、夕には庵にかへり、夫のため、食となしてこれを勸め、たまさかにも、人のなさけにて、美味の物をおくれど、己は食はずて、夫にすゝめけり、人、木石にあらざれど、その操に感じて、後には、食をおくり、粗き單衣などおくりて、憐を垂れけれど、昔の富には似るべくもあらざれども、筵を、古の錦と思ひ、つゞれの袖を、綾の袂に准へ、粟飯を、米の飾にたぐへ、藜を、魚の羹として、夫をみとり、惜しからぬ露の命も、病ひ人のために、ながらふるばかりは心やすかりけり、されば、その近き里のまゝしき親、中あしき同胞、妬みぶかき夫婦、よめ姑も、この松の操を見きゝて感じ、鑑となりて、一人も殘らず和らぎたり、昔は、さし出づる月の面影をあざむき、春に笑へる花の色、霞にけぶる黛の下に、黒き練糸を、二筋ばかり並べたらん心地する細眉も、海人の鹽やくまで愛敬ありたるも、今は、病夫のために、髮を揚げざれば、池の玉藻にことならず、手足の爪とて採らざれば、ながき例にいふ鳥にや似たりけん、されど、なほ、殘る貌の美しけれどにや、山の井の水を酌みて、桶を戴き、川を渡りて、里の

營より、夕邊にかへるを伺ひ、近き傍のたはれ男ども、何くれと言寄り、靡けんとすれど、聲をあげて、こゝに人のと叫べば、皆々おどろきて、後々は、松の通るに當りて、邊へだに近づく男もなかりきとかや、又、五月雨、夕立などする頃、遠方の里に、なりはひのため、行きて、川の水まさり、夜に入りて、我が宿に歸らんこともかなはじと思ふに、人は情ありて、今宵はこゝになどいへど、病夫も心元なく、又は、わが身を潔よくせんとにやあらむ、身も袖も、ひとつに濡るれど、川を渡り、家にかへりて、一夜も、他所に寢ることなし、抑、松が父は、呂の里にても、人に敬はれ、家榮えたる人なれど、凡人のならひにて、娘の操をも感じだにせず、却りて思ふやう、われ、愛しき娘を、見苦しきかたゐに預けおくこそ遺恨なれ、取返して、こと人にゆるし、ゆたかなる末の代をも見むやと思ひ、松を呼びて、その由をいへど、女は、ハラ〳〵と涙を流し、さていふやう、さても情なき仰を承り候ものかな、われ、今、病める夫を捨てなば、誰か、これを見繼ぎ候はん、然らで、たゞ、死ぬるほかは候まじ、世に時めける時もかり夫にて、かくなりはてゝは、夫には候はぬにや、さる義理も候まじ、されど、夫の不幸は、妾の不幸なり、とてもかくて

も、病夫をこそ見はて候はめ、再嫁のことはゆるし給へといひ捨てゝ、庵にかへり、其の後は、親里へもゆかず、父母は、もと、情なき人なりしかバ、大に腹立ちて、かかる女こそなけれ、よしさらば、娘とも思はじ、あなかしこ、消息すなとて、それより、親の中は絶えにけり、野口も、我ゆゑに、妻にまで憂目を見せ、あらぬさまの衰を、苦しみてあることよと思ひければ、或る時、妻に向ひていひけるは、我こそ、かゝる身となれ、そこには、われゆゑに、などか、浅ましき目を見せむ、父母のためも恥辱なれば、里にかへり、いかなる人にもあひなれて、行末めでたき在狀を聞かば、實に、われもうれしからんと云へば、松は、うつくしく笑ひて、つれなき人の御言かな、千代をかけたる夫の、惡しき病うけ給ひ、今、かく、浅ましくなり給ひたれバとて、それを見捨てゝ、富貴の人に嫁せらるべしや、夫妻の間は、榮枯盛衰を以て、かはるべしとも覺え侍らず、もし、君恙なくて、我病をうけなば、すて給はんや、返すぐも、なさけなき御心かな、是非、そひ給はむことかなはずは、妾は、いかなる淵瀬にも、身をなげ候はん、などてか、異人にはまみえん、それ、さも無くは、萬、自にまかせ給ひて、心やすく養生あれかしと、言を盡してい

ひければ、野口も、涙を押へ、このうへは、ともかくも、心に任せ給へといへど、松もよろこびて、いよ〳〵、看護を怠らざりけり、されど、夫は、十年ばかり病みて、遂に、空しくなりければ、妻の歎、いはんかたなく、泣く〳〵、野邊の煙となしたれど、なほ、その爲に、三年の間、同じ庵に籠り居て、夫のことのみ悼みしが、其の身も、遂に、思ひ積りて、身まかりぬとなり、

　しぐるれど草葉のこらずうら枯れてたのむかひなく弱るまつむし

　千代こめし松のいろさへかれぬれど賴むにかたきいのちなりけり

右は、藤井懶齋といへる人の、婦女の教諭にとてものしたる壺の石文といへる書に見えたる事實なれば、はやくより、讀み知れらん方も多かるべけれど、松女の貞操、凛然として犯すべからず、嚴乎として奪ふべからざるものありて、あまりに愛でたく、實にこよなき婦女の龜鑑と覺ゆれど、原文に、いさゝか修正を加へて、こゝに掲ぐるものぞ、

家政

育兒小言（三十四）

武谷水城

慣習の事（つゞき）

人の身の、強弱健否も、亦大抵は、幼時よりの慣習に依りて、分かるゝものなり、其の故如何にと云ふに、總じて、人の身心健全にして、生を遂げ、業を就すは、心と力との、二の者の働きに依る事にて、二者いづれを偏重すべからずと雖も、畢竟、力てふものありて、心の養を爲すに非ざれば、心の靈妙なる機能も、自然に滯るものにて、譬へて云はゞ、心は燈火の如く、力は燈油の如きもの、亦、心は琴の音の如く、力は琴の絃の如きものにて、油盡くる時は、火獨明なる事能はず、琴の音の高低は、正しく琴絃の弛張に伴ふ、されば、体力の養方を怠りて、獨心神の健全ならん事を欲するは、恰油を十分に點せずして、燈火の明ならん事を望み、弛みたる絃を鼓して、高き音調の發するを希ふに等し、故に此の點より言へば、力は人の生理の本、心は末にして、人は只一の力によりて、生活したるものにて、力なければ、身無く、心なし、といふも可ならん、兎に角、力の作用は、寔に至大至廣のもの也、されば、此の体の力の養成方、其の法を得たるものは、身強く心も健に、養成方、其

の法を得ぬものは、身弱く心も健ならず、所謂蒲柳の質と爲るべし、
然るに、此の大切なる人の力は、原何ものより生ずるものぞと云ふに、呼吸により
て採りたる空氣と、消化器より取りたる食との、二の者より生ずるものなる故に、
此の二者さへ善美にして十分ならば、力も亦十分なるべき理なるに似たれども、是
れのみにては、中々に心身の健康を保つ事能はず、(高閣に住み、輕衣を着、美食の
飽きたる人に、顔面蒼白、筋肉の强硬ならぬが如し、)其の故は、此の二物より生じ
たる力の養方、法を得ぬ時は、其の力自然に萎靡するものにて、元來人の身心は、
其の天稟の妙機を應用するに、自然の則あるものにて、使用不及なるか、又は甚く
過度なる時は、彼の力の母たる二者の收納は、善美にして十分なるも、時を經る久
しき間には、終に其の妙機滯るのみならず、甚きは全く廢絶するに至る・例之ば、心
神の過勞は、肺勞、又は發狂、を誘ひ起こし、四肢の如きも、一室に屛居して、久
く使用せぬ時は、筋肉萎縮し、甚きは脂肪に變じて、終に同く其の機能廢絶するに
至る、(久く牢居せるもの、出牢の時、腰の立たぬものあるが如きも、此の理に因る
ことなり、)入ては深室に安居し、出でゝは馬車に深坐して、數十日間、足地を踏ま

ず、萬物生育の母たる日光にさへ、觸れざる人、無きにしも非ず、されバ、小兒の体力をして、此る方に傾かしめぬ事肝要也、特に小兒の時は、筋肉發育の機能、最も盛なるものにして、其の体質も、亦仕附け次第にて、强弱いづれにも變化し易きものあれど、此の時其の身の仕附け方、最も肝要の事なり、

我邦德川氏の末迄は、人間の交際も繁多ならずして、心を勞する事、今日の如く甚からず、之に反して、勞力の最も少き士と雖も、一定したる武藝上の勞働を爲さゝるを得ざる慣習なりしも、今日世態一變するに及んで、心を勞する事、復昔の比にあらず、(學童已上のもの、學藝に於るが如きは、特に然りとす、)是れ既に、身の尫弱と爲るべき一因なり、されど、此の時に當りて、一層体力の養成を十分に爲して、心身の尫弱と爲るを補ふべき筈なるに、彼の鎗刀弓馬の武術の如き、体力養成の爲に最良なる技藝は一切廢れ、(近年は他の躰育法次第に旺なるに至りしとは雖も、)一方にては、精微なる科學闡るに從ひて、心を勞する事益多く、(使用過度、)体力を要する事益寡く、(使用不及)勞心と勞力との偏倚甚く、是れ實に、衣食住の程度上り、衞生の道も進み、人の命の平均數も、次第に増す傾きあるに係らず、社會の一部に、

体格薄弱、肺患、脳患、等の増加する所以なるべし、則貴族、富家、の子弟、士族、學生、一部の坐商、等に多く、農工等は身体強剛のもの甚多し、（証事徴兵の体格の上に就て、精細なる統計上の証據あれ共、くだくだしければ言はず）有爲の望ある學生の、中途志を齎らして、斃るゝもの少からざる事は、統計を俟すして、知るを得べし、其の中途にして斃れざるものも、概ね身体薄弱のもの多きは、上に述べし事實に徴して明なり、此れ等の青年の人々は、自今二十年の後には、此の國際競爭の渦中に立て、第二の日本帝國を代表すべき、前途の重任を負ふものなれば、其の身心の根元たる、体力の養成方は、關係する處、至大のものある也

漬物鹽加減（四）

駒込烹軒

獨活味噌漬

山うどを、二三日蔭干よくして、ぐなぐなするやうにして、二年味噌につける、百日むかりにて、風味よし

冬瓜味噌漬

冬瓜を、皮ともにたち、中實を、深くすきとりて、かるく押をかけて、一夜水をとり、布巾にて、水氣を拭ひ、皮をむきて、直に、味噌に漬けるなり、味噌に、水溜りたらバ、又、みそをとりかへて、外のみそに漬ける、かくすること、二三度におよぶべし、水も出なくなるを度とするなり、さすれど、いつまで、たくはへおくとも、味かはる事なし、水の出る中、ゆだんすべからず、又、金冬瓜といふ一種も、かくして漬くとも、度々手がけざれど、久しくは畜へがたし、

花丸瓜粕漬

花まる瓜は、生にて、直に、粕に漬けるなり、すべて、生のまゝ、粕に漬ける物には、桶を二重底に拵へ、下に糠をいれ、水をおとすやうにせぬときは、粕のかはるものなり、糸瓜なども、右の通にして、粕につけるなり、

西瓜粕漬

西瓜の花落、若きうちに取りて、丸のまゝ、粕につけるなり、是れも、花丸漬の仕法にして、つけるなり、紀州若山より出づるを、名物とす、

初夢漬

花落茄子の蔕を切りまはして、甘く塩押にして、芥子をかき、醤油にてゆるめ、少し白砂糖を入れて、塩梅して、茄子を漬けるなり、日數多くは持ちがたき品なり、

鼈甲漬

糠味噌漬の故き茄子を、丸にて塩出して、よくしぼりて庖丁し、味淋酒を澤山にかけて、浸しおくこと三十日ばかり、茄子、すきとはるほど、ひやけて、奈良漬の茄子にまさること遠し、

麴漬

醴麴三枚に、味淋酒一升をかけてねかし置き、干瓜に、塩押茄子、干大根などを刻みこみ、紫蘇の實、生姜、たうがらしをも、すこしづゝくはへ、能く、つかりたる時に、賞翫すべし、これ、漬物の醍醐味ともいべし、

百味加藥漬

生姜、茗荷、茸、蓼、紫蘇、青柚、山椒、大小の蕃椒、右の類、何品にかぎらず、塩押にして、たくはふべし、生の品ありあはぬ時は、ちよつと、塩出して、間にあはせる事、まゝ多し、料理意ある者は、必たしなむべき事なり、俗に、えの實たうが

らしといふまるきをも漬込むべし、

巻漬

ふとき大根、小口より、薄くはやし、よく干して、たくはへ置き、塩蓼、生姜を、はと引きり〳〵とまき、輪たうがらしを帯にして、三杯酢に漬けおく、

阿茶蘭漬

はし大根を、一寸計りに切り、立に四つ割にきざみ、みつから、昆布、生姜、茗荷の子、塩押茄子、つと麩、小梅干等を加へて、酒醤油にて、酢は梅の酢を用ひて、當座漬につける　尤きくらげ、たうがらしを入るべし、又、蓮根、獨活、新牛蒡、時時の品を加ふるも可なり、

菜豆青漬

夏の土用中に、隠元、さゝげをとりて、豆腐のからの水氣を、よく絞りとり、塩と等分にまぜて、右いんげんを、押漬につけて、動かさずして蓄ふ、冬のうちより、春へかけて、塩出しして、銅鍋にて湯でれど、其の色、生のごとし、さのみ、風味もかはることなし、

蕗水漬

水蕗、生にて皮をむき、葉とかりを擂鉢に入れ、鹽にてもみ、青き汁をとり、蕗は、鹽にて漬けこみ、右葉の青汁を入れて、押を置くなり、遣ふ節、鹽出して、羹物に入るれバ、生のふきに異ならず、

看護法捷徑（二十四）

三笠舍主人

（五）凍冱

一劇しき寒氣に冒さるゝか、若くは輕寒と雖、久しく身体の一部に觸るゝ時は、終に其部の血行止み、生機廢して、凍冱を興す、寒中雪中に旅行するもの、此症に罹る事多し、

二凍冱を通常其輕重に應じて、三度に分つ、寒冷の爲に皮膚暗赤色と爲り、或は凍瘡(寒冷を冒し殊に冷却するに當り、急に其部を温る等によりて發す、)を生ずるものを第一度の凍冱と云ひ、之れより進て、冒されし部に水泡を生じて、黄色又は血を混じたる水様液を含むものを、第二度の凍冱と云ひ、其部の組織蒼白と爲り

て、全く知覺を失ひ、尋で黒色に變じて、數日の後、其部全く壞死するものを、第三度の凍冱と云ふ、

三 全身凍冱に罹る時は、皮膚總て蒼白と爲りて厥冷し手、足、唇、鼻、等は青色を帶び、四肢強直して硬固と爲り、耳輪、鼻、指、趾、等は堅くして、氷片に觸るるが如く、精神の機能全く廢絶し、呼吸淺くして、外より其有無を察知し難く、心動、脉搏、共に幽微にして、手に觸れ難し、此時速に救護せざれは、爲に命を殞するに至る、是を凍死と云ふ、但し、最初は先假死に陷り、終に眞死に歸する事、溺沒と異ならず、

四 雪中其他劇寒中に於て、凍死ある時は、極て靜かに抱き起し(少しにても、粗暴の取扱を爲す時は、凍冱せる部を破碎するの恐あり)て、先寒冷なる室中に移し(決して直に温室中に移すべからず。又温物を身に觸れしむべからず)注意して衣服を除き去り、(脱せしむべからず、直に剪り開きて除くべし、然ざれは身を傷る恐あり)雪、又は冷水にて、全身を摩擦し、又は冷水を浴盤に盛り、其中に入れて全身を摩擦すべし、或は大なる布片を氷水に漬して、患者を被包し、更に時々

冷水を注ぎて、摩擦するも可なり、但、面部のみは雪又は水中に沒すべからず、此くして、四肢少しく柔軟と爲に及び、初めて寒冷なる褥中に安臥せしめて、猶摩擦法を行ひ、身体及四肢稍々動搖し得るに及で、人工呼吸法を行ひ、傍ら絶えず摩擦法を行ひ、患者自ら呼吸を營み得るに及て、先づ濕き被衾を被ひ、次第に厚きものに及ぶべし、

五　右の方法にて、患者の氣力稍々回復するを俟ちて、初めて少く室內を溫め、漸を以て溫度を增し、傍ら微溫の濃茶、若くは少量の醇良なる酒類を與ふべし、

六　若し最初より直に患者の身を溫め、又は溫室に移す時は、乍ち死に歸するものなり、注意せざるべからず、

(附)　人工呼吸法

人工呼吸法とは、溺沒、凍冱、窒息、其の外總ての假死症にて、呼吸一時全く廢絶するものに施して、呼吸を回復せしむる法也、其の法二樣あり、第一法は、患者を仰臥せしめ、頭及び上身を稍々高くし、介者は、患者の口を開き、舌を引出だし、細き布を取りて、舌より項[illegible]に繞らし結びて、口の収閉及舌の退

縮を防ぎて、大氣の出入に妨なからしむ、術者は、患者の頭邊に跪きて、患者の左右の上膊を握り、共に引擧げて、患者の頭上に至らしむ、此くすれば、肺臟、及胸廓、自然に開張して、外氣肺中に泳入す、凡そ二秒時にして、更に患者左右の腕を下げて、胸側に至らしめ、且兼て稍胸側及び心窩を壓して、肺中の空氣を自然に呼出せしむ、此の如くする事數十回、遂に患者自呼吸し得るに至りて止む、第二法も、其の方法は稍異なるも、呼吸を喚起するは第一法と異ならず、總て一時呼吸の止まりて、諸種の方法功なきもの、此の人工呼吸法の外に良法ある事なし、之を施すには、實地に熟練するを要す、

學園

本邦女子文學略傳（第九）

目黑和三郎

儀同三司母

名は貴子、從三位高階眞人成忠の女なり、故に高内侍ともいふ、中關白道隆公と、深

くかたらひて、後遂にその室となる、新古今集にいでたる、「わすれじの行末まではかたけれど」の歌は、當時道隆とかたらひける程の歌なり、道隆の室となりて、男伊周公、及び一條天皇の中宮定子とを生み奉れり、故に權貴限りなかりき、されど伊周公は、品徳かくる所ありて、初め十九歳にて、正三位に叙せられ、權大納言となり、やがて内大臣に昇進せしが、長徳二年四月に、罪を得て、太宰權帥に左遷せられぬ、その罪とは、その頃鷹司殿に、二人の美人ありしが、花山法皇は、妹の方に通はせ給ひ、伊周は、姉なる女にかたらひけり、かゝるところより、法皇は、その姉にも通はせ給ふと思ひ誤りて、弟の隆家等と申し合せ、法皇を道に要して、弓を射奉り、危くも御袖に當りぬ、これによりて左遷の罪にあひぬるなり、中宮定子は、この事を聞き給ひて、兄弟の左遷を悲しみ、一門の不徳を怨み、自みどりの黒髪をきらせたりとぞ、かゝる程に、中宮の寵愛は、ます〱盛りに、遂には敦康親王を生み給ひしを以て、兄弟左遷の罪も宥され、召しかへされて、伊周は准大臣になりぬ、儀同三司といへるは、この時より伊周の稱へいでける名にて、この母をも儀同三司の母といへるなり、儀、三公に仝じといへる意なり、貴子既に國母となり、

權貴並びなく、世に輝くばかりなりけるを、わが子の不義不忠を得とめで、その惡名を成しゝは、母たる務を欠けりといふべし、和歌の道に、文章の道に、はまれ高く、ろの歌どもは、勅選に入りて、この道には捨てがたき婦人なれども、婦徳の方よりは、とりがたき婦人といはんか、當時藤氏の横行は、この母の子のみには限らず、なべての事にはわれど、さりとて、かの菅公の母伴氏などにたぐへなば、いかばかりか思ひ劣りのせられなん、百世の遺憾なりし、

伊勢大輔

大中臣能宣の孫にて、父は伊勢の祭主輔親なり、よりて伊勢大輔とはいへり、一條院の御時、中宮彰子即上東門院の宮仕なり、大輔和歌に妙に、殊に敏捷を以て名あり、紫式部、和泉式部、小式部等と、齊しく數へられぬ、大輔の初めて宮に入りける時は、未だ若かりけるが、關白道長も側に在りぬ、たまたま櫻花を奉りける者ありたるに、道長筆硯をとりて、大輔に和歌を題せしめたり、大輔筆とり、立ろに、「古の奈良の都の八重櫻」の歌を書きたり、道長はじめ、人々大にめでたりといへり、この時のことを、詞花集春部に、一條院の御時、奈良の八重櫻を、人のたてまつり

て、その折、御前に侍りければ、其花を題にて、歌よめと仰ことありければ、とあり、さて大輔、後に越前守高階成順の妻となり、いとむつましく住みなして、六條の大貳、堀河の大貳などいふ人は、大輔の孫に當れるよし、宇治大納言物語に見えたり、又同物語に、

みるめこそあふみの海のかたからめ吹きだに通へ志がの浦風

といへる歌をのせて、大輔の、はじめて、成順の妻になりそめし頃、夫石山にこもり、音信のなかりしほどによみやりしが、この歌によりて、益々情交こまやかになりけるよし見えたり、歌には皆敏妙のもの多し、但宇治物語には、成順を、越前守となし、その他同書に、越前守の妻は伊勢大輔、など見えたる所もあるを、後拾遺集には、筑前守とあり、同人の、二度受領を重ねしにや、はた別人なりや、詳ならず、識者の教へを請ふになん、

日本文典（つゞき）

杉谷正隆

(三) 時格

時格とは、語尾の變化によりて、時をあらはす法を云ふ、之に左の四種あり、

第一 過去
第二 半過去
第三 現在
第四 未來

第一 過去とは、既に過ぎ去りたることを云ひあらはす法を云ふ、此の時をあらはすには、常に、第二格を用ゐるなり、而して、助辭の、けり、ける、けれ、たり、たる、たれ、に、ぬ、ぬる、ぬれ、き、し、しか、て、つ、つる、つれ、などをそふ、例へば、「花咲きけり」、「日出でたり」、「紅葉しぬ」、「雪ふりき」、「年暮れつ」などの如し、猶、助辭のことは、下の助辭の處に委しく云ふべし、

但、此の第五格は、助辭の作用によりて、未來をあらはすことあり、例へば、「若菜つみてん」、「花折りなん」、「日出でなむ」、「雪ふりてむ」などの如く、む、むなどの、未來の助辭のそはりたるときは、未來となるが如し、此のことも、くはしくは、助

辭のところに云ふべし、
第二　半過去とは、目の前にて、已に終りたることを云ひあらはす法を云ふ、此の時をあらはすには、常に、第五格を用ゐるなり、而して、助辭の、ば、ど、どもなどをそふ、例へば、「花咲けば」、「月出づれど」、「紅葉見ゆれども」などの如し、
第三　現在とは、目の前にあることを云ひあらはす法を云ふ、この時をあらはすには、常に、第三格と、第四格とを用ゐるなり、助辭の、なり、なる、なれなどをもそふるなり、例へば、「花咲く」、「月出づるなり」、「山越ゆなり」などの如し、
但し、第五格も、係結の作用によりては、現在となるなり、例へば、「花こそ咲け」、「月こそ出づれ」などの如し、そは、下の係結の處と照合はせて知るべし、
第四　未來とは、未だ起らざることを云ひあらはす法を云ふ、この時をあらはすには、常に、第一格を用ゐるなり、而して、助辭の、む、め、まく、まし、まし、かむなどを云ふ、例へば、「花咲かむ」、「月出でまし」、「雪ならむ」などの如し、

（四）　命令格

命令格とは、他に向ひて然せよと、作用を命令する格を云ふ、之に左の二種あり、

第一　已然格より、命令となるもの、
第二　連用格より、命令となるもの、

第一　已然格より、命令となるものは、正格四段活にはたらく作用詞なり、例へば、「花咲け」、「月てれ」、「花を折れ」、「月をもてあそべ」の、咲け、てれ、折れ、もてあそべの如し、此の咲けは、咲かん、咲き、咲く、咲く、咲け、てれは、てらん、てり、てる、てる、てれ、折れは、折らん、折り、折る、折る、折れ、もてあそべは、弄ぜん、弄び、弄ぶ、弄ぶ、弄べと活く四段活の作用詞にして、皆、第五段の已然格より、右の如く、命令となるものなり、

但、此の四段活の作用詞の、第五段已然格は、こそと云ふ係の辞を結ぶことあり、その時は、命令とならず、例へば「花こそ咲け」、「月こそ照れ」の、咲け、てれは同じ已然格なれども、此の如く、こそと云ふ係の辞を結びたるときは、唯、咲く、照ると云ふ意味を、強く云ひたるまでにて、花や月にむかひて、其の作用を命令する意にあらざるなり、かゝる處は、よく〳〵注意して居らざれば、大に、文意を誤解することあるべきなり、

又、此の四段活、第五段已然格には、よと云ふ辭をそへて、命令とすることあり、例へば、「彼を取れよ」、「書を讀めよ」などの、よの如し、

第二連用格より、命令となるものは、正格の上一段活、下一段活 上二段活、下二段活、及び、變格の加行變格に活く作用詞なり、此の時は、四段活の第五段已然格とは違ひて、大方は、よと云ふ辭をそふるなり、例へば、「衣をきよ」、「朝とく起きよ」「高き名を擧げよ」の、着よ、起きよ、擧げよの如し、

但し、變格の加行變格は、第二段連用格のきと云ふ語尾より、命令となるにあらず、上の活用圖に、きの下に、(こ)とあげおきたり、其のこと云ふ語尾に、よと云ふ辭をそへて、命令とするなり、例へば、「花見にこよ」、「明日もまたこよ」の、こよの如し、又、此のこよと云ふ命令には、よと云ふ辭を省きて、四段活、第五段已然格の如く、單よ、こと云ふ語尾のみにて、命令とすることもあり、されど、此は、文章には、あまりなくして、歌に一二あれど、其の歌を、左に掲げて、其の用例を示す、「月夜よし夜よしと人につけやらばこてふに似たりまたずしもあらず」(古今集)などの如し、

來と云ふ作用詞を、命令にするは、右の如く、二通あれども、普通には、よをそへて用ゐるかた宜し、

又、變格の佐行變格は、命令となることなし、此の作用詞にして、命令の意をあらはすときは、正格下二段活の、第二段連用格よりするものと知るべし、又、奈行變格も、命令の意は正格四段活の、第五段已然格よりあらはすなり、されど、前の例に準じて知るべきなり、

此の他、命令の意をあらはすものは、助辭にも、あれども、其は、作用詞の語尾の變化にかゝはらず、助辭の變化によりて、其の意をあらはすものなれど、そは、又下の助辭のところに至りて、委しく云ふべし、

漫錄

三卿三說

松野操雄

藤原定家、爲世、爲氏の三卿は、みな、和歌の家に生まれ、ともに、一世の名匠なり。おの〳〵、書を著し、文を草して、後世、斯の道をたどらんもの丶爲に、敎へ諭されしところ多し。今その一

班をかゝげて、諸嬢に紹介するは、あながち、用なきわざにもあらざるべけれど、つぎ／＼しるすべくなん。こを、よく讀み、よく解きて、評論をこころみ給はんは、諸嬢の思のまに／＼。（因に曰はく、定家卿の子を爲家卿といひ、爲家卿の子に爲世、爲氏卿等あり。）

和歌庭訓抄　　藤原爲世卿

一心はあたらしきをもとむべき事

此の事、古人のをしふる所、更に、師の仰にたがはず、但、あたらしき心、いかにも出來がたし、代々の撰集、世々の歌仙、よみのこせる風情あるべからず、されども、人の面のごとく、目は二よこさまに、鼻は一たてさまなり、むかしより變はることなけれども、しかも、又、おなじ顔にあらず、

されば、歌もかくの如し、花を、白雲にまがへ、木の葉を、時雨にあやまつことは、もとよりの顔の如くに變はらねど、さすが、おのれ／＼とある所あれど、作者の得分となるなり、あたらしきをもとむるとて、さまあしく、いやしげなる事どもをよまむことあるべからず、故九條內府の、御自讃の歌に、

明方のあまのとわたるつきかげに
　うき人さへやこころもうつらん

と侍るをば、故入道民部卿爲家は、無下の傾城かなと被難侍りけり、げにも、人に、心をつくさせて、戀はるゝほどの人の、手づから、衣うたん事、心うく侍るべくや、いはんや、作者、

後京極攝政の御息、正二位内大臣ほどの人の、傾城さるすさびやは侍るべき、但、歌のならひ、さのみこそ侍れ、たゞ、大かたの事にてこそはあらめ、必しも、作者の、傾城としもや申侍るべきと、のがれ侍るべきにや、去かれども、歌は、作者によりて、用意のあるべきとぞ承り侍りし、御歌ざまは、めでたくこそ侍らめ、近比、たれとはおぼえず、百首歌を、人の見せられ侍りしに、擣衣のうたに、

擣音の去ぞしとだにてきこえぬは
　今やころもをまきかへすほど

といふ歌の侍りしを、或人の仰せられしは、擣衣の歌は、鶯の聲、琴の音にもまさりて、やさしく聞所など侍るに、入りたちて、案内者げに侍るこそ、みぐるしく侍れ、大かたは、古人もかゝる事ならぬまでは侍らじかし、然れども、みぐるしきことなどは、すてゝよみ侍らぬを、めづらしき事ののこりたるとて、求出だし、よまれ侍るは、口傳なきのいたす所にこそ侍らめ、是は、うき人よりも、すがたいやしく、心おとりてこそ侍らめ、此の外の歌ども、よろしからぬのみ侍りし、心あらん人は、たづねて心得らるべき歟、又、續千載集のとき、めされ侍りし御百首の中に、草かり入るゝ野田の苗代とやらん、よまれて侍りし歌を、或人仰せられ侍りしは、是も、無下に俗にちかく侍るもの哉とぞ侍りし、げにも、田舍にて、いかなることぞとたづね侍りしかど、田作とて、こえとかや、もちいる

などぞ申し侍りし、若、さも侍らむ、きたなくや侍らん、いかにも、家の庭訓をも受け、師の口傳をも聞きたらん人は、いかにも、かゝる事は、よも詠み侍らじ　作者たれともしり侍らぬは、若、すぢなき事ともや侍らん、大かたは、世の中、みな、ぢけ／＼しくなりて、かざりたる僞にふけりて、實に、まよふ事のみ侍るこそ、今さらなる事にては侍らねども、心うく侍れ、或は、遠國などにて、我が身をたてんとて、重代の家督をそしり、或は、家の秘説は、我こそ習傳へて侍れと申す人も侍る、或は、門弟などに信せられんとて、よどころなき事を申出だし、或は、宗匠などは、よわく、かひなき歌よみにて、少も、風情こもり、力ある歌は、人の歌をも見知らず、我が身もよますと申すをきゝて、信仰する人、かずをしらず、是、まめやかに、ふかくまどへるなるべし、其の故は、代々傳へたる家領等、悉ゆづりわたへ、度々、朝家に採用せられて、勅撰を承る家督には、秘して教へぬ事を、庶子に授くる事、しかるべしや、家領は、僞るところのなきまゝに、我こそ、相傳と稱する人、見え侍らず、道は、うへに見えぬ間、無窮の僞に及ぶ、しかれども、明察の御代に、皆わらはれ侍りぬるにこそ、又、歌のよわきとは、いかゞ心得侍るべきにか、心ふかく、詞よろしく、姿うつくしく侍るを、つよき歌とは申すなり、萬葉集のみゝとほき詞、凡俗の心をよめるこそ、よわき歌とは思ひ給ひ侍れ、但、卑劣

の風情は、故人詠じもらしたれど、求よく、幽玄のすがたは及ぬまゝに、よまれ侍らねバ、むけ物を信仰するにこそ、

一詞は、ふるきをしたふべき事、

是、又、古賢の教、尊師の說、一同なり、然れども、くはしからぬまゝに、まよふ人多く侍るにや、所詮、古くよみたれバとて、萬葉集のみみとほき詞など、努々好み讀むべからず、三代集の中にも、よろしからぬ詞どもゝ侍るめり、むべ、なべ、べらなり、さかしら、かくのごときのことぞ、おほく侍るにや、かまへて、やさしく、優ならん詞を、とらんとしたふべしとなりとぞ承り侍りし、但、八雲御抄には、詞には、よきもなし、あしきもなし、只、つゞけか

らなりと侍るめり、是、又、金言なり、但、つづけがらよからん事は、申すにおよばず、末の代の歌よみ、つゞけがらなれバとて、よくはつづけずして、あしざまにつゞけよみて、よくよめると思へるさま、かぞふるに及バず、おほく侍るめり、況、よそりなで、ことそへぐ、こまつるぎわざみの、あつぶすまなごやが下などは、よきほどの上手は、よろしき歌に、よみなし侍りぬともおぼえ侍らず、但、近代、はけ／＼しき上手たちの秀逸には、さだめて出來侍るが、それも斟酌や侍るべからん、高野にて、大師入定の心をよまるゝとて、しなてるやと詠せられたる事の侍るとかや、是は、聖德太子の、片岡山のうゑ人に、あそばして給はせたりける、し

なてるや、かたをか山と侍る御うたを、太子傳とく法師の侍りしが、しなてあるやと申し侍りしを、聞かれて侍りけるにや、よも、家說にては侍らじ、萬葉集に、しなてるや、かたあすは川と侍る歌は、河をしなてあるかと詠じたるにや、おかしくこそ侍れ、ならの葉の、ならはぬふるごとどもは、いかにも、ひがごとの出來侍るものを、凡、幽玄によまんと思ふ給ふたるも、心賤しく、智みじかくして叶ひ侍らぬに、いかなる詞なりとも、などか、うつくしう、なしたてざるべきとて、思ひかゝる事、かへす〴〵、きもふとくこそ侍れ、かへりて、愚をしらぬとかや申し侍らん、又、人のしらぬ詞をよみて、物しりたるよしせんと思へるくはだて、おろかなるさま、いとをしくこそ侍れ、只、すなほによみて、上手ならむこそは、世にも人にも、用ゐられ侍らんかし、それは、かなはぬまゝに、人をおどさんとて、あしもともしらず、鬼のおもてしたる歌どもをよみて、只、世の中を損ずるのみにあらず、先祖の敎をそむく事、道をまもらん神、いかでかとがめ給はざらん、惡智識にひかれて、同罪にしづまん人、よく〳〵、心をめぐらすべきにや、猶々、日本紀、萬葉集の詞どもよみて、人もしらぬ事を、知りたるよしするさま、朝野にみち〳〵て、自受法樂とかやしたる、道の魔障、不可勝計こそ、

（つゞく）

萬葉時代の詞の古今時代の詞に移りたるゆゑよしに就きて（承前）

諏訪忠元

古今集戀の部

題しらず　小野小町

うたゝねに、こひしき人をみてしより、ゆめてふものは、たのみそめてき、

題しらず　素性法師

わきのたの、いねてふことも、かけなくに、なにをうしとか、ひとのかるらん、

題しらず　讀人しらず

はるたてば、きゆるこほりの、のこりなく、きみがこゝろは、われにとけなん、

いま、この二の集の歌をくらべみるに、同じ戀情を云ひあらはすにも、一は、まのあたり、情に迫りてよみいでしものなり、されど、其詞簡單なれど、情ふかし、一は、其詞たくみにいひあらはしたれど、其思ひぬる情、あさくきこゆるなり、今、上の歌等の詞によりていはゞ、萬葉集に、とふといひし處に、古今集に至りては、てふといへり、其意一にして、いづれも、といふの約まりなり、また、古今集に、なんと云へるを、萬葉集には、なもといへり、いま、この二の詞を、互にうたひみるに、てふは、とふより、また、なんは、なもよりも、優にきこゆるなり、かつ、古今集時代に至りては、戀情を、歌合によみ、あるは、人に代りて、よむことさへあるに至れり、されど、其歌をいひあらはす詞も巧みにして、かつ、浮華

にかたむけり、

寛平御時、きさいの宮の歌合の歌、

藤原敏行

あけぬとて、かへるみちには、こきたれてあめもなみだに、ふりそぼちつゝ、

ある女に代りて、かへしによめる、

在原業平

あさみこそ、そではひづらめ、なみだがは、みさへながると、きかむたのまん、

かく、其歌、實情に遠くなれりけり、

萬葉集挽歌、

柿本人麻呂妻死之後、泣血哀慟作歌、

こそみてし、あきのつくよは、てらせれど、あひみしいもは、いやとしさかる、

ふすまぢを、ひきでのやまに、いもをおきて、やまぢをゆけば、いけりともなし、

また、大伴家持のよめる、

いもがみし、やどにはなさく、ときはへぬ、わがなくなみだ、いまだひなくに、

さほやまに、たなびくかすみ、みるごとに、いもをおもひて、なかぬひはなし、

の如き、其詞、いと質撲なれども、其思ひあまり、みるもの毎に、妹をしのびいづるさま、よくあらはれて、いみじう、あはれにきこゆるなり、

古今集哀傷歌、

妹の身まかりける時、よみける、

小野篁朝臣

なくなみだ、あめとふらなん、わたりがは、

みづまさりなば、かへりくるがに、

さきのおほきおほいまうち君を、白川のわたりに、おくりける夜、よめる、

素性法師

ちのなみだ、おちてぞたぎつ、しらかはゝ、きみがよまでの、なにこそありけれ、

堀川のおほきおほいまうち君、身まかりにける時に、深草の山に、をさめてける後に、よみける、

僧都勝延

うつせみは、からをみつゝも、なぐさめつ、ふかくさのやま、けぶりだにたて、

藤原敏行朝臣の、身まかりける時によみて、かの家に遣はしける、

紀友則

ねてもみゆ、ねでもみえけり、おほかたは、うつせみのよぞ、ゆめにはありける、

の如き、其歌死をいたむよりも、やゝ、詞をかざりて、巧に云ひあらはせり、かく、人心の、いとゞ動きやすく、また、感情の深き戀愛、悲歎をいひあらはせる歌さへ、かくなんありける、いま、かくなりにけるもとをたづぬるに、前條にもいへりし如く、佛法のひらけゆくに從ひ、やうやう、人世の常なきを感ずると共に、天下の人民、公卿の奢侈の風をならひしかば、いたづらに、遊惰の心にかたむきて、我國固有の勇壯の心は、いつしか失せて、優柔なる婦女子とかはれる事なきにいたりしかど、其思想をいひあらはす詞も、また、

したがひて、懦弱となりにけるものなるべし、

（完）

嫁のしるべ

故人　肥後　大塚退野

丙午の年、娘の人にゆきけるが、未、物の理を知らざれバ、人の家を破らんことを恐れて、敎戒の事どもを、書きてつかはし侍る、大やう、五種を撰出しぬ、これのみにやむべからざれども、それは、後日の事とすべし、

一君子に奉りやうの事、

一君子の父母に奉りやうの事、

一身のまもりやうの事、

一身のたしなみやうの事、

一召仕の男女あはれみやうの事、

君子に奉りやうの事

男は陽にして尊く、女は陰にして卑きが、即ち天地の道なり、是に基きて、常に、夫を敬ひ從ひて、假初にも、あなどり輕しめ、悖戾くべからず、陽はいざなひ、陰はやはらぎて、萬物も生るゝに基きて、夫婦、よくむつまじく和きぬれば、必ず、子孫繁昌す、假初にも、まめならず、うらめしき心を持つべからず、此敬、從、睦、和、の四の德を失はぬやうに、日々につとめて誠あれば、必ず、家齊ひ、子孫繁昌す、身安く、心樂む事、その中に在り、これ、この四の德は、もと、生れ來る折柄、天より、女に與へたまふものなり、されども、生れ來るより、見る事、聞く事の習に晦まされて、この德義、我に生れ得て備りあるこ

ことを知らざるなり、今たしかに、本來我に在ることを知りて、篤く信じ、つとめ行ふべし、さて、また、この德を傷ふ人慾を克去るべし、人慾の種多き中に、怒、怨、嫉妬、怠惰、この四病、少しも心に萌さば、きつく戒め、克ちてらして、胸中に痕なくすべし、色に顯れ、言辭に出でざれども、人の心に移るものなり、よく〳〵つとめて、かち去るべし、

一には、怒り腹立つこと、人每に、なき事はなけれども、輕き薄きあり、重く厚きあり、輕きは、少しく心に萌せども、色にあらはれず、薄きは、色、言辭にあらはるといへども、そのまま消えて痕なし、輕きは、無きに等し、薄きは、外に見ゆといへども、物に害あるに至らず、重きは、言辭にあらはさぬといへども色に顯る、厚きは、言辭あらく、言ふまじき事をいひて、氣ふさがり、後先の顧もなくて、禍を招くなり、若、左なくとも、心にこもり、一日二日は、常ならぬ心合あるも、厚きの類なり、さて、何故、腹は立つぞといへば、我に逆ふより起ること多し、このもとを、深くかへりみて、そのもとを塞ぎ、念慮の萌に、心をつけて、早くはらひ去るべし、少しも胸中におくべからず、

二には、怨、憤、是は、大やう、我に愛らしからず、我に隔意ある時に、怨の意出來るなり、是大なる惡心なり、おほよそ、人の世にすむに、我と我を苦しめて、心を焦し、身を危めて、一時の安心なきは、この怨の心あればな

り、家内に、一人怨の心あれば、その家、不和にして治まらず、女の、人の家にゆくは、齊ふるたすけなるに、却て、我ゆゑに、家内を不和にするは、その罪遁るべからず、このゆゑに、如何なる無理なる事ありとも、怨の心もつべからず、あまさかさまの事ありとも 我心に、行とどかぬゆゑにこそ、かくあるらめと、我身にかへりみ、我足らぬことを勉行ふべし、このこと、眞實あらば、などかは、人もあはれと思はざらん、若、怨の心深くば、君子にすてられ、舅姑に憎まれて、身の禍たちどころに來るぞかし、

三には、嫉妬の心、つゆもあるべからず、その故は、夫の妻をむかふるは、子孫を設けて、先祖の祭祀を繼がしめ、繁昌せんのためぞかし、然るに、妻たるもの、嫉妬ありて、子孫出生せずして、祭祀絶えたる類多し、然れば、人の家を亡す大なる罪科なり、それのみならず、嫉妬の心あれば、家内騒がしく、其身も、常に安からず、このゆゑに、聖人も、妬あれば去るべしとの御おきてあり、すこしも、この惡しき心を持つべからず、若、おもと人など、孕める事あらば、随分勞はり、平産さすべし、子生れなば、能く養育つべし、或は、世の聞を憚り、小産などせさせんとのはからひありとも、必ず、申しとどめて、平産さすべし、それも、かなひ難くば、舅姑に、懇に請ひ申すべし、さて、また、召仕のもの丶、年々密通のなきやうに、よく〳〵

制し戒むべし、これは、嫉妬にてはなく、却て、君子のために謀るなり、世の女は、我夫にのみ、嫉妬をなして、家内男女のみだりがはしきをゆるすは、さかさま事なり、

四には、怠惰、これは、君子のおほせごとをおろそかに、又、我爲すべきわざをのび〳〵にして、心まゝなる振舞をいふ、この怠惰は、さしつけて、がいとは見えねども、このまめしげなく、氣隨なる心、常となりぬれど、後に、害出來て、家齊はぬものなり、よく〳〵つとめて怠るべからず、おほよそ、つとめをこたらぬは、上一人より、下庶民まで、なくてかなはぬ事にて、婦人の身に限らねど、女は、内にのみ居て、をこたりやすきものなれど、とりわけ、心をつけてつとむべし、或は君子のいつくしみを得れば、初つゝしみしことを忘れて、なれ〳〵しくなるは、いやしき女の癖なり、是をよく辨へ、よくつゝしみて、なれ〳〵しき振舞あるべからず、

おほよそ、文を讀まざれど、心の鏡明ならず、心の鏡暗ければ、萬事宜を失ふものなり、ひめかゞみ、鏡草、たゞずくりかへしよむべし、一度よみてのちは、又讀むこと好ましからざれども、それを繰返し、幾度も讀むべし、後には、おもしろくなるものなり、殊に、ひめかゞみは、いにしへ、聖人の御言葉も多ければ、假名書ながら、うちつけには聞え難し、よく〳〵くりかへしよむべし、必ず聞得るものなり、この二書を、よく讀ま、

ぞ、我この文は、贅物なるべし、　（つゞく）

歌のことゞもひとつふたつ

故中島廣足

むかし、永章が家の、正月の會はじめに、心靜汲春酒、といふ題にて、光輔「すがのねのながき春日にくむ酒はゑへる心ものどけかりけり、とよめりしを、おのれ、いたくめでゝ、まことに、たかきしらべなり、及ぶべからずと、光輔にあふごとに、うらやみほめたりしを、光輔きゝていふやう、此歌は、あまり何事もなく、かやすき歌なりとて、たれも、こゝろとゞむる人もなきを、そこの、かくほめらるゝは、いみじき見つけものし出でたるなり、といへりき、さて、年へて後、光輔、京へのぼりし時、よめる歌どもを、景樹に、おほく見せたりしに、あるが中にも、此歌をぬきいでゝ、光輔が歌の第一と定め、さては、「草まくら旅のそらにぞ思ひしるわが故鄕はすみよかりけり、といふを、これにつげりとして、ほめたりき、といへり、此物語をきゝて、おのれが、はやくほめたりしも、かひありておぼえしなり、たけたかき歌の味ひは、しる人すくなし、景樹死しては、此味ひをしる人、たれならむ、しらずかし、

景樹が歌に、高調なる、いと多かれど、おほかたの人は、それにはめもつかで、たゞ、めづらしくいひなしたる、彼人の、わろきくせある歌をのみ、めではやすめり、まことに、耳あきたる人は、すくなきものなりけり、「いかだおろす淸瀧川のたき

つ瀬にちりてながるゝ山吹の花、此歌、まことに高調、其けしき、眼前にうかびて、たやすくよみがたきなり、是を、おほかたの人は、いづこがよきとて、心もとゞめぬは、まことに、其餘情ふかきをえ志らぬなりけり、おなじ人「山吹の花ぞ一むらながれけるいかだのさをや岸にふれけむ、かへりて、此方を、よしといふ人多きは、其心のくだれるを思ふべし、

高調の歌は、古歌の句調に似たれば、かの初學の人の、古歌をとりて、作りたつるにかはらぬやうにて、其味も、ふとは志られず、たれもよまるゝやうにおもはるれば、たゞ、かいなでのやす歌のなみに聞なして、心をとゞめて味ふ人も、おほかたなきものなり、今の世は、たゞ、一ふし耳わたらしく、こまやかに、たくみにいひなしたるをのみめでゝ、歌の姿の、いやしくくだれるを、おもふ人なきは、まことになげくべき事なり、世の歌人、玉葉、風雅の、風調わろき事は、さしも、いやしめながら、みづからよめる歌の、かへりて、彼風調にもおとれる、いやしきさまなるはいかに、」歌は、たゞ、うつはものおほきにして、品たかく、調とゞこほらぬこそうたなれ、此さかひに、深き味あることを志る人なし、歌とのみ思ひて、其さま志らぬなるべしと古今の序にかゝれたるは、まことに、さることなりけり、高調の歌は、ふと打見ては、さのみなきやうなれど、あまたゝび打吟ずるまゝに、ます〳〵、味出くるものなり、一ふしたくみて、作りたてし歌は、一わたり打きゝ

ては、をかしきやうなれど、あまたゝび吟ずれど興つきて、うたておぼゆるなり、源氏の雨夜物語なる、さまゞゝのたとへこと、歌のうへにてもおなじことなり、よくおもふべし、

ある人の詩を論じたる書に、凡詩者、辭義甚淺、而意思甚深者也、意思之所以深、不在辭義、楚辭曰、嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下、又曰、王孫遊不歸、春草生兮萋萋、唐詩曰、夜來風雨聲、花落知多少、此皆辭義至淺、兒女子所能言者、而意味雋永、都在言外、非諷詠無以覺其妙、云々といへる、歌もおなじこゝろぞへなるをおもふべし、歌は、ことわるものにあらず、志らぶるものなり、と景樹がいへるも、さる事にこそ、

小野小町の考（つゞき）

故本居内遠

今世、小町集とて傳はれる家集は、後の人の書き集め、諸書より拾ひ出せる物と見ゆ、三十六歌仙家集といふ中に入たり、又一本異本ありて、少し違へれど、是も、後に輯せるものなり、群書類從に入たる本是なり、すべて歌仙家集は、みづからかきつめ置たるは少くして、後に人の集めたるが多く、中にも、人丸、赤人、猿麿などのは、誤もいと多し、されば、小町集も、より難き事ある中にも、「あさか山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは、といふ歌の入たる本あり、此歌は、もと、萬葉集十六卷に出で、古今集かな序の古注に、葛城の大ぎみを、みちのくへつかはしたりけ

る時に、うねめなりける女の、かはらけとりてよめるなりと出で、序の本文にも、あさか山の言の葉は、うねめのたはぶれよりよみて、といへるにあはず、もしは、此采女、すなはち小町なりと云ふにや、系圖に、父良實を出羽守と記し、又、古今集目錄には、出羽郡司娘ともいへれバ、昔は、國國の國造、郡司などのむすめ、妹などを、采女に奉る事なれバ、みちのくには、由ありては聞ゆれど、猶、いかにぞや覺ゆる事なり、さて、又、此歌を、大和物語下には、昔、大納言のむすめ、いと美しみてもち給ひたりけるを、御門に奉らむとて、かしづき給ひけるを、殿に近うつかうまつりける內舍人にて有ける人、いかでか見けむ云々、ゆくりもなく、かきいだきて、馬にのせて、みちのくにへ、よるともいはず、ひるともいはず、逃ていにけり、あさかの郡、あさかの山といふ所に、庵をつくりて、此女をすゑて云々、たち出て、山の井にいきて影を見れバ、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりにけり、鏡もなけれバ、顔のなりたらむやうも知らで有けるに、にはかに見れど、いとおそろしげなりけるを、いと恥かしと思ひけり、さてよめる、あさか山云々とよみて、木にかきつけて、庵に來て死にけりとあり、是、甚異說なり、されど、此傳は、歌の意と、前の次第と、叶ひ難きやうなれど、よしとも思はれず、萬葉集の左注、古今集の古注ぞ、まことなるべき、此大和物語を引て、古今著聞集に、此大意を記せり、

五卷三十二丁

又古事談二に云く、業平朝臣、盗二條后（宮仕以前）將去之間、兄弟達（昭宣公等）追至奪返之時、切業平之本鳥云々、仍生髮之程、稱見歌枕、發向關東、（見伊勢物語）宿奧州八十島之夜、野中有詠和歌上句之聲、其詞曰、秋風之毎吹般穴目穴目、就音求之無人、只有一之髑髏、明旦猶見之、件髑髏目穴より、薄生出たりけり、每風吹薄之靡音、如此聞えけり、成奇怪思之間、或者云、小野小町向此國、於此所逝去、件髑髏也云々、爰業平垂哀憐、付下句云、小町とは云はじ薄生たり云々、件所を、小野と云けり、此事見日本紀式、とあれど、いと覺束なき事なり、日本紀式といふ書も、聞つかぬ者なり、此事は、袖中抄十六に、此歌を出して、顯昭云、あなめあなめとは、あなめいたく（目痛目痛）と云なり、凡此歌の心は、江記云、在五中將、爲嫁件后（二條后）出家相構、其後爲生髮、到陸奧國、留八十島、求小野小町尸、夜宿件島、終夜有聲曰、秋風之吹仁津氣天毛阿那目云々、後朝に求之、髑髏目中に有野蕨、在中將涕泣曰、小野止波不成薄出計里、即斂葬云云、童蒙抄云、此歌、小野小町集にあり、昔野中をゆく人あり、風の音のやうにて、此歌を詠ずる聲聞ゆ、立よりて尋ね聞たるに、詠じけるなり、其すゝきを取捨て、その頭を清き所におきて還りぬ、其夜の夢に、われは、是、昔の小野小町といはれし者なり、うれしく恩を蒙りぬといへり、さて、此歌を後集ゟ入れたるなり、

古今目錄云、小野小町者、出羽國郡司女也云々、數十年在京好色也、然而歸本國死去、故屍在八十島歟、小野者姓歟、住所歟、と記せり、江記といへるは、いかなる書にか、もしは、古事談に出たるをおぼえ誤りたるか、別か、此うた、意きこえかねて拙く、其比のさまとも覺えず、後人のいつはり記せる事なるべし、又、小町集にありと云へど、今本には見えず、是も初にいへる、あさか山の歌を、小町集に加へたる類にて、出羽郡司女と云より、みちのくの采女と云をも、同人の如く思ひて、後人の加へたる如く、みちのくにて死せりと云ふも、さる類にて作出せるなるべし、但「おきのゐて身をやくよりも悲しきは都しまべのわかれなりけり、といふ歌、古今集にも、伊勢物語にも、小町家集にも見えたり、此地名は、陸奧の地なり、此比は、よしもなき他國の名所などを、後の如く詠む事なければ、若、みちのくに居たりし事も有りといはんか、又、家集に、みちのくへゆく人に、いつぞかりかといへる詞書あるも、これに合せて思へど、舊里なるより、よき便など思ひて、問たるにもやあらむ、されど、あさか山と詠たる采女の事は、もと、萬葉集十六卷に出で、左注に、右歌傳云、葛城王、遣于陸奧國之時、國司祗承緩怠異甚、於時王意不悅、怒色顯面、雖設飮饌、不肯宴樂、於是有前采女、風流娘子、左手捧觴、右手持水、擊之王膝、而詠此歌、而乃王意解脫、飮樂終日、と記せり、小町ならば、名をも記すべきに、前采女

とのみ書るは、名は傳はらざるなり、此時、名の忘られざるに、後に人も多きに、名高き小町なりと知るべきやうはなけれど、こは、必おしあての僻言なるべし、

（をはり）

こぼれ梅

渡部乙羽

其十一

浮世の夢の曉近く、亂れ入りたる赤穗の義士に、長夜の眠を覺されて、寢耳に水の大呌喚は、實に三界は火宅の諺を現じて、綾羅の蓐に蝶と化したる女の童、腰元、仲間、草履取の小者に至るまで、泣き呌び逃げ迷ふ有樣は、殿司の筆に殘る地獄變相の繪に寸分も違はざりき。

されども義士の面々は逃げ迷ふ賤しきものには眼もかけず、目ざす敵は上野介一人なるぞ、物の數にも足らぬ下司下郎を損ひて、後々の物笑ひとなるな、別けて女性は緣無き者なれど、勦りて逃がせよと、表門を堅守たる原宗右衛門、老いたれども勇氣凜然と、長身の鎗を杖になして、雪に足場を踏みしめつゝ、拮と睨んで呼ど、

りぬ。其聲朗にして凍るが如くなれバ、了得に騒ぎ立てたる屋敷も見る間に靜まりかへりたり。

朧ながらも十四日の月、雪氣を含む大空一杯に凝りて、影は玄關の廂を照せバ、乱れ入る味方の火事羽織のみ、微よそれと見え判きて、松明高張のぎら〱と入口の板戸に映るは、星飛んで庭の松に宿るかと思はれぬ。

折しも納屋の口より長刀を閃かしつゝ現はれ出でたる腰元二人、緋縮緬の襷、白絹の鉢巻を夜更の風に靡かして、群れ居る義士の眞ッ只中へ割って入りぬ。一同この有様を勇ましげに見遣れど、一人は花も羞かしかるべき美人、後に立てるは冬の松の色無けれど、威風犯すべからざる女丈夫なりき。大高源吾は持てる松明を高く振翳し。さても勇ましき御婦人かな、兩刀佩む郎黨さへ、後背を見せて遁げ失せる中に、吉良殿とは如何なる所縁のお兩方か、後殿して我等に手向ひ給ふこと、天晴の御心根、大高源吾はと〱感服いたしたり　苦しからずバ御名を名乘らせ給へと呼べバ、不思議や女性は聲うるませて。大高殿よう問うて給はりし、妾等ことは斯世に家無き果敢無い身の上、父や夫は赤穂方に味方しながら、娘や妻は其方樣へ手

向ひせねばならぬ義理、何をお隱し申ませう、それなるは原宗右衛門殿のお娘御、これは山岡覺兵衛が後家のお粂、吉良家の內情探らんため、假りに奉公するとは云へ、一日仕ふるも君は君、今主君吉良殿が討たれ給ひしを、餘所に眺めて遁げられませうか、斯くなる上は所詮赤穗へも歸れぬ成行、娑婆に家無く親なくぞ、潔く死んで忠義を徹底さませう、サア斬り給へ、いざ〳〵お手向ひ仕つらむと、持てる長刀振廻して、寄らば切らんと身構へたり。

後邊に凛たる聲あつて、今の一言殊勝なり、それ矢間どの生擒せよと、粋なる下知に重次郎も、進みかねてや二の足踏むを、心弱しと大石はなは聲高く。矢間どの怯れしか、えッ優しやと呼んだりけり。

並び居る面々、眼を注ぎて女性を見れど、質にこれ梅か梨の花、艶なる色の紅白は、源平いづれ旗色好きか、風情はなほも一入の、露の涙に打潤れぬ。

二人は慇懃に手を支きて大石に一禮し。妾々二人は斯く一同に取圍まれては、所詮遁げ延びんことも叶ひ難し、存分に御成敗給はれかしと述ぶれど、內藏之助は頭をうち掉り。いや、いや、其方がやうな忠義な者を、赤穗の武士は手に懸けぬぞ、生





きて忠孝全うするは、おう〳〵それよ、兩人とも尼にして遣はすぞ、此處を立て、時刻移らば故障や起らん、各々吉良上野介が首級を揚げたるぞ、積年の鬱憤今ぞ晴れつらむ、これ見られよ、この口にて主君内匠頭を嘲りしか、この眼もて能くも我が君を蔑視たるよなど、遺恨の數々並べ立て、一同歡喜の聲を震はし、嬉し泣きにぞ泣きにける。

はや夜は明けたり。アレ〳〵東は白んで、鷄も啼き出でたるぞ、この間に一同引揚げよと、大石が下知に喜び勇んで、吉良家の門を立出れば、朝風亂れたる鬢の毛を吹きて、その寒さ肌を劈くが如し。

されども聞き傳へ云ひ傳へて。それ前代未聞の目覺しき復讐なるぞ、今の時に見後れなば、悔ゆとも詮なかるべしと、人の山、足元の波、一條の往來を差挾んで、中央を悠々と通り過ぐる四十七士の裝束、いづれも火水の難を辞せぬ火事羽織着て、積れる雪を黑めつゝ行く態の男らしさ、鎗の穗先の立並ぶは、佃島の朝景色かとも思はれて、帆柱の林を兩國橋の上に見けり。

頓て泉岳寺も近うなりぬ。高輪の海晴れて、万波熨すが如く平かに、さし昇る旭日

朧々として水を彩り、鵆の飛び立つは引揚げを喜ぶか、滿城の人は恰も狂するが如くなりき。

高輪の出口に今朝咲きし二枝の花は、これお粂お琴が義士の泉岳寺へ引揚ぐるを、遠く打眺め居るなりけり。竪やの字の帶、御殿風の髮風俗、誰が目にもお屋敷の庭に根生えの名木と、銘をも打つべき身にて、仲間もつかず小者も無く、伸び上り震ひ上りて、嬉しげに物見する樣の怪しきを、通りかゝりの人々、足を留めて睨みぬ。

文林

秋月勝春花　有栖川宮御息所董子御方

朝ぼらけかすみに匂ふはなよりも
まさるは月のひかりなりけり

華頂宮御息所郁子御方

咲けばちる梢のはなにくらぶべき
ものかは秋のつきのひかりを

近衛　忠熙

てりまさるつきの桂のもみぢばの
色にははるのはなもおよばじ

徳大寺實則

くもりなく千里をてらす月かげは
　花みるよりもたのしかりけり

月前霧　東久世通禧

うすものに包める珠とみゆるかな
　霧たつそらのあきのよのつき

楠正成母　黒田　清綱

たちむなのかくの果實を覆ひつる
　はゝその影の高くもあるかな

秋月勝春花　高崎　正風

久方のつきにこゝろをすます夜は
　かすみに匂ふはなもおもはず

前田　利嗣

春ごとにさく花よりもあきのよの
　つきのひかりぞたち勝りける

前田　利鬯

さかりなる月のかつらの影みれば
　花のにほひもおよばざりけり

水邊立秋　諏訪　忠元

隅田川みぎわのあしの末たばより
　ふく風すゞしあきやたつらん

月　中島　宜門

月みればまさめにうかぶむかし哉
　わすれじとだに契りやはせし

上地　信光

あやしくも袖こそ玄めれゆく末を
　月にかぞふる夜半ならなくに

秋月勝春花　植松　有經

あきのよの月の圓居にくらぶれば

春のはなみはあはれともなし

谷　勤

秋のよの月のひかりにくらぶれバ
たちもおよばぬ花のしらくも

琵琶湖　　光岡　正彰

びはの海なみかど高くきこゆるは
治まるみよをいはふしるしか

陸奥采女　　佐々　豊水

手習のみちのしをりと代々かをる
この山の井のふかきことのは

朝顔　　草野　隆道

おき出でゝ妹が垣根をみるごとに
數まさりぬるあさがほのはな

秋月勝春花　　鍋島　榮子

花あらバ競べて見ましよもすがら
あくことしらぬ秋のよのつき

前田　朗子

ちりやすきはなにくらぶる光かは
長閑にむかふあきのよのつき

伊東ちせ子

秋夜のつきをわすれてたぐひなき
ものとも花をおもひけるかな

伊藤　生子

あきの夜の月をしみれど春やまの
花のさかりもわすられにけり

松本　健子

咲くはなのおもかげのこる白雲も
はれて今宵のつきぞさやけき

ちるをのみをしみし花に競ふれバ
長閑かりけりあきのよのつき　田邊　君子

花の本にうかれしよりも秋のよの
つきみにつどふ友ぞおほかる　小池　道子

櫻さくはるはあれどもよひ／＼に
みる月こそはしたしかりけれ　田邊たつ子

わすられぬ春の花をもわすれけり
隅田がはらのあきのよのつき　中澤のぶ子

花にのみうかれし春はあきのよの
つきのあはれをしらぬなり鳧　鶴　久子

霧中鶉　三輪田眞佐子

秋霧のたつのゝをぐさうらかれて
とこをうづらの聲をきくかな

浦鶴　諏訪　晴子

すまのうらや白波よする夕かせに
千とせをうたふ友づるのこゑ

瓜生保母　小川　昌子

武士もいさみたちけむはゝそぞの
くむさゝのはの露にくるひて

秋月如鏡　光岡　長子

秋風にこゝろもすめるつきかげは
くもりなきよのかゞみなり鳧

本居宣長翁の玉あられをよみて

川口とは子

櫻根の大人のさとしのあとをだに
ふみなむ人のみちはまよはじ

きぬたをきく詞

勝家貞良

荻の葉風もうらさびそめて、虫の鳴く音も、身にしみまさり、夕ぐれごとに、むすぶ霜のかず、やう〳〵しげくなりゆくころ、ふけゆく月影に響きわたりて、かなたこなたに、遠く近く聞こゆるは、擣衣の音なりけり。あはれ、いづこの里の賤の女ならむ。誰がために、打ちいそぐらむ。長きよすがら、いねもやらず、くりかへしつゝ、あるはしきり、あるはたゆみて、千々の哀を打ちそふる、住みなれし家にきくだに悲しきものを、まして、旅の宿の空なれど、故郷の妹が手すさびも、忍びいでられて、袖の露は、一しほおきまさりたるに、すみわたりたる月影も、さし入りぬれば、虫の音も聞こえずなりぬ。いまは、たゞまぎるゝものもなく聞こゆる、こよなう哀なり。

鹿

尾崎すう子

しか、いとあはれ也。晝なくよりは、夜ぞ、猶あはれなる。秋ののに咲く萩のにしきを、妻とは、たがさだめてか、まかせつらむ。冬野に成り行けば、うつろひはてゝ、みる影もなく、霜かれふしたる、いかゞみるらん。さやうなるをも、猶たえ

ずとふらん。あるは、いづこに、獨寢はすらんと、人のいぶかしみいふさへをかし。

雜報

●常宮殿下の御明敏　常宮昌子内親王殿下は、當今第六の　皇女におはしまして、明治廿一年九月、御生誕あらせられ、今年、やう〳〵、六歳ばかりにおはして、いと御幼齢にわたらせ給ふも、御明敏にして、慈愛の徳に富ませ給ふことは、取る年あまたの老女も、なか〳〵に及び奉らぬ程なりと、承り奉るぞ、ことに尊き。さいつ頃、御避暑のため、下野國日光山に、御滯在あらせられし折のこと、かよ。同地小學校長某は、町長某等と共に、生徒四百餘名を率ゐて、御機嫌を伺ひ奉り、種々の遊戯を試み、御慰に供へ奉りしに、　殿下には、御養育主任佐々木伯爵に向はせられ、彼の生徒の中に、眼病を惱めるものあれば、侍醫に命じて、疾く診察せしめよと、宣はせられぬ。佐々木伯爵は、畏まりて、其の旨、町長に告げられ、町長は、校長、および、教員等に告げたり。皆々は、更に氣附かざりしとて、直に、各生徒に就き、取調べたりしに、果して、一名の眼病者ありければ、この旨答へ奉りしに、　殿下には、尚、一名ある由、宣はせられたり。此に於いて、皆々は、愈、御明敏の

程に感じ奉り、ふたゝび尋ねたりしに、前の眼病生の妹も、また、眼病を悩み居るとの事なれど、直に、右の兄妹二人を呼び、侍醫伊東氏をして、診察せしめられしに、殿下の仰せ違はず、眼病なりしより、それ〳〵、治療を施して、歸宅せしめられしに、日ならずして癒ゑたりとぞ。此の事を洩れ聞く遠近のもの、何れも、深く感じ奉らざるはなく、わけて、兄妹二人の親は、一入感涙に咽び奉りたりとぞ。吾人、こを記し奉るに當りて、また、坐に、涙あえて、聖明の御代に生まれ合ひたるを、今更のやうにうれしび奉りぬ。

●孝女佐藤つる　の事實は、井上毅うじが、國文雜誌にものせられたるが、いとつばらかなれば、こゝにぬきがきしつ。

佐藤つるは、岡山縣後月郡出部村の產なり。幼くして、父みまかりければ、母と姉とのみにて、世をおくりけり。貧しき家なれど、母は、二人の女を育てむとて、人に傭はれなどして、辛うして、年月を經にしが、憂苦の余にや、遂に、精神の疾に罹りぬ。時に、つる、纔に七歳、姉なる子は、性質愚にて、物の理をだに辨へざるを、つるは、強ひ勵しつゝ、倶に、母の疾を勞りけり。されど、よき生活の道を得ざれば、饑に迫るばかりのことも、しば〳〵なりき。偶〻惠み與ふるものあれど、つるは、喜びて、これを受け、先、母に捧げ、次に、姉に進め、尚余りあれど、飢を支へけり。其後、母の疾、稍癒ゑて、姉は、近村の人に嫁ぎけり。今は、つる、たゞ獨して、母を養ふとて、

人の圃を借りて、稼ぎ耕し、朝は、夙に出で行き、夜は、晩く歸り、風をも雨をも厭はず、男子に劣らず、勞働きけるが、圃に居る時も、母の疾の、心にかゝれば、をり〱走せ歸りて、その顏色を伺ひけり。又、天氣暖なる日などには、前の畚には、母を載せ、後の畚には、鋤鍬の類を入れ、手弱き肩に擔ひ行きつゝ、母をば、田の畔、或は樹木の陰に休はせ、己、その傍に、耒耜を執りて、母の心を慰めけり。つるは、平生、麁衣惡食して、蓬髮に、櫛をだにさゝざれども、母の好むものは、何くれとなく求めて、得させぬはなかりき。母、年、いたく老いて、夜も眠に得就かずなりぬ。つるは、枕邊に侍り、或は、背を撫で、或は、肩を捫み抔して、その安らけく眠るを待ち、さて、細き燈の下に、絲を績ぎ、小車を繰りて、夜深くるまで働きぬ。或人、その孤勞を憐みて、夫を迎へよと勸めしに、つるのいふやう、他人を、我家に入れなば、母の心安かるまじ、母の、此世にいまさむ間は、己、獨身にてあることこそよけれ。さはいへ、貧しき爲に、心にまかせぬことの多かるぞ、恨めしきとて、涙に咽びしを、聞く者、袖を沾しぬ。事、官に聞えて、明治十八年十月、縣令より、金若干を賜はりければ、つるは、大に喜びて、これ、父母の恩なりとて、直にかへりて、母に告げ、又親戚鄰里の人にも向ひて、厚く、その恩を謝したりき。明治二十六年六月、母は、積る年と共に、疾重りて、賴み少なく見えければ、つるは、憂に堪へかねて、十日餘は、夜も睫を交へずして、

一すぢに勞りけり、母、今はの際になりて、つるを呼びて、汝、手弱き身ながら、長き年月の間、家事を勤め、孝養盡る所もなし。今より後は、汝は、自の身を大切にし、又、汝の姉をいつくしみてよといふにぞ、其は、仰せたまふにや及ぶべき。心にかけさせたまふなど答へしかば、母は、眉打開き、微笑みてぞ身まかりける。時に年七十八なり。つる、母の屍に抱きつき、痛く哀み哭きて、人心地たえぬばかりなりき。つるが、かねて、日夜勤勞せし結果として、田圃二反までも闢きて、收穫せしものは、衣食の代に當てゝもあまりありしを、嚮に、縣令より賜はりしものを、併せて、郵便局に托け置きけれど、葬事の料にも、事闕かざりけり。さて、喪畢りたる後も、朝夕よ、香を焚き、火を點し、菓物を供ふるなど、母の生けりし時の如くにし、又、姉に、よく事へて、其の遺言、あだにせざりけり。つるは、孝行すぐれしのみならず、一家の主として、公令を守り、田租雜稅といはず、掟のまに〳〵、先ちて納むるなど、昭代の民に背かず。明治二十四年十二月、雲の上に聞えて、勅定の綠綬褒章を賜ひ、その善行を表彰せられたり。

都留女が母の疲を勞る時の心を

いとゞしも心せくらん風さむみ
衣かりがねの鳴きわたるよは

●音聲　女は、音聲を愼まざるべからず。今の女學生なるものゝ音聲は、さもあらく〳〵しく、犬の吠えつくにかと思ふばかりなるがあり。むべ。

他の女壯士といふも。されどとて、あながちに、女らしがらせんとてか、聞きとり難き細音のがあり。これにも困るめり。まして、いかにもなまめかしく、あだめかしきは、娼婦といふものも、かくやあらんと思はれて、いともけがらはし。

●注意　こは、孃等が、月々送り越したまふ兼題につきてなり。兼題をおくらるゝに、物なれたる手といふにや、いかにも、走り書にせられたるがあり。記者のごとき暇少なき身には、判讀するに、いと苦しめり。あはれ、この後は、今少しやはげて、記者に、あたら時間をつぶさせ給ふな。

そこにして
　ふかしさいふは
　　たのまれず
あさくてかげの
たねせずも
　　がな

（壬生忠見）

餘芳

心つくし（つゞき）

税所敦子

吉備津の宮に、まうで奉りしに、御社よりはじめてなにでとも、いつくしう、都にもまれなる御宮居なり。宮司、かむなぎなど、みてぐらさゝぐとて、いと、おほきなるかまどに、火をたきて、こしきやうの物、うちかつぐれば、たちまち、ひゞきいでゝ、かひなどを、吹きたてたらむやうなり。神のうけたまふしるし、いちじるきに、人々、なみだ、とゞめあへず。こゝをまかでゝ、一里計りゆきしかば、よしある山のそばに、うびやかなる石、ふたつ、ならびたてり。しめなどひきて、いと、かうぐしう、いつきまつりたるも、いぶかしうおぼえて、里人にとへば、をん陽石とか。やまひなど、いのるに、とみに、をこたらせたまへば、かくは、あがめまつれりとぞ。いと、めづらしう、をかし。都いでゝよ

り、ひさしう、のどかなりし空の、此の二日、三日、うち曇りて、備後國糸崎といふを、過ぎぬるころは、やゝ、雨ふりいでにけり。こゝのけしき、はた、すま、あかしの浦つたひに、をさ〳〵おとらず。日比またれし、五月雨のをりからにさへ、もてはやされて、涙は、いと、しづかなるものから、海面、くらきこゝちして、をちこちに、もしほの烟、立ちのぼり、まちかき沖の島山に、雨雲の、たえ〳〵かゝれるなど、すべて、いひつくすべうもあらず。かゝる旅だに、いでざらましかばと、いと、めづらしう、かひありてさへおぼゆ。

くりかへしみれどあかぬは糸崎のさみだれそめしけしきなりけり」。早くより、氣色たちて、ふりいでにける雨なれば、いかに、ひさしからむとおもひしを、又の日は、なごりなくはれて、いとゞ、あつさの増さりぬるに、あやにくに、山路ばかりにて、いと〳〵、くるし。石だてといふさかをのぼりしかば、いみじきしみづの、大きなるときは木の陰に、夏ともしらず、わき出でたるありけ

り。うちみるより、まづ、あつさ、わするゝこゝちして、

古郷もわするゝ物は山水をむすぶしばしのこゝろなりけり」。十三日は、いつく島にまうでぬ。かねては、ふなぢを、いと、おそろしき物におもひて、かう、日毎に、かさなる山を、ゆきめぐりても、なほ、浪路にとは、おもひかけぬを、此のしまのありさまの、いと、ゆかしう、みまほしければ、おそろしきもわすれて、いそぎのりぬ。けふしも、浪風、いと、のどかにて、くがちをゆくに、かはることしなければ、思ひの外に、めづらしきこゝちしてなん。をちこちの島など、みわたすけしき、いはんかたなし。海のおもては、あをく〳〵として、たゝみなどを、しきたるやうなるに、くらげといふものゝ、いみじう、しろく、花の散りたるやうにて、たゞよひうかべるも、いと、めづらしう、をかし。嶋ちかくなりぬれば、大きなるいはほ、あまた、海のかたに、さしいでゝ、びやうぶを、ひきめぐらしたらんやうにて、けしきある松どもの、生ひ出でたるも、とり〴〵に、あ

かず、おもしろし。此の宮のありさま、名にかきたるにも、はるかにまさりて、まことに、この大やまとの國にて、三景とかいふらむけしき、ことわりに、ありがたくなん、おぼえし。

沖津浪たつの都のおもかげをうかべてみするいつくしま山」。あかぬほどにしも、こぎはなれて、いと、くちをしう、かへりみのみせらる。こたびは、風、すこしたちて、こゝちも、いと、あしかりき。未のさがり計りに、くはといふみなとに、つきしかど、こよひ、やどるべき地は、まだ、いと、はるかなりければ、道のほどにて、日もくれはてぬ。山路がちにて、いと、ものおそろしきに、うちくもりたる月の、すぎの木のまを、もりきたるも、めづらしきものから、音羽のやまに、待出でしかげを、おもひくらぶれば、こよなう、物すごきこゝちして、

あまりにもうとき山べにいりたれば月さへあらぬ心ちこそすれ」。けふは、いとゞ、つかれはてゝ、おもはずも、うちねぶりしにや、いつしか、やどりにつき

てなん、我ながら、あまりに、よういなき心のほどにもと、淺ましう、思ひしらる。

雲かゝるみねのかけぢをゆく〳〵もみやこにかよふ夢をみしかな」。いまは、半ばかりもきぬらんと、うれしう、おぼゆるに、みやいちといふ所にて、よもすがら、雨ふりしきりて、あけぬれど、いでたつべくもあらず。こゝかしこの渡も、たえぬときこゆれば、すべなくて、こゝにとゞまりつゝ、人々は、でうち、琴ひきなど、おもひ〳〵に、あそびあへれど、心にもつかで、ふるさとのふみ、かきすさびなどしつゝ、はれま、まちわたるほど、千歳をすぐす心地す。

山をこえ野をゆくよりもくるしきは雨にたゆたふ日ごろなりけり」。

(つゞく)

教の庭

九月廿日衆題　菊帶露

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　高知縣高岡郡佐川村西村　小川銀子

菊の花にはふさかりはおきわたす
つゆもいろある玉かとぞ見る

地　京都烏丸通中立賣下ル龍前町　石井かめ子

朝な〳〵いくたび露のおきかへて
きくは千とせの色やそふらん

人　熊本縣菊池郡隈府町　小橋幸子

菊の花さきのさかりはあさな夕な
おきわたす露も香ににほひ㒵

おく露にひかりさしそふきくの花　上野かね子
天津ほしかとまがひぬるかな

おく露にぬれていろそふ菊のはな　高井米子
秋のあはれのかぎりなりけり

白露のたまをかざせるきくのはな　土屋淸子
あきの夕かぜふきなちらしそ

つゆの玉いろ〳〵にこそ光りぬれ　佐々有鄰子
庭のまがきのきぎく志らぎく

秋ふかく今をさかりにおきわたし　千々波橘子
つゆもかをれる庭の志らぎく

志ら菊の花のまがきにおくつゆも　永井さい子
千代の色香ににほひぬるかな

置く露に千代もこもれる色見えて　河野文子
さかりに匂ふ志らぎくのはな

かざしにとおもひしものを菊の花　犬塚圓子
折らむ千歳のつゆやこぼれん

さく菊ををらんとすれど白つゆの　溝口信子
玉ぞこぼるゝにはながら見ん

立ちよりて折りなばにはの白菊に　溝口惠喜子
おける露もぞこぼるべらなる

いと深き露はおもげに見ゆれども　石井德子
千代もとさける志らぎくの花

置く露を玉にかざしていく千代も　東　しめ子
うつろふいろをしらぎくの花

小夜嵐ふけゆくまゝにおとたえて　伊藤　澌子
ゆたかにかざす露のしらぎく

千代のわきさかゆるにはの菊の花　藤井つや子
おくしらつゆに色やますらん

久方のつきのしづくかしらつゆを　新野尾喜起
かざしてにほふきくの一むら

月もかれず見つゝくらさん白露の　久保田律子
たまをあざむく園のしらぎく

朝露ににほひをそふるしらぎくの　片岡　光子
はなのいろ香はこと更にして

白つゆのたまをかざして朝な／＼　植木しい子
さきこそまされそのゝしら菊

此のまゝに千代の簪としてしがな　内田　慶子
まがきの菊のつゆのしらたま

もろともに老いせぬ秋や契りけむ　内田　雪子
結びて見ゆるきくのしらつゆ

手折りなば玉と乱れんうるはしく　羽田みさ子
つゆをおびたるしらぎくの花

千代迄も老いせぬ色と見ゆるかな　羽田たか子
つゆおきそふるしら菊のはな

おとたてゝあだにな咲きそ長月の　坂本伊枝子
菊に千代もとむすぶしらつゆ

ふきおくるはなの匂もえならねど　野尻　鶴子
露ぞこぼるゝきくのうはかぜ

いろ／＼の色をば見せて秋の夜の　南大路素子
月をやどせるきくのつゆかな

おきわたすつゆの命はしらねども　南大路正子
さかりひさしき菊のはなかな

さきそめしまがきの菊におく露も　南大路芳枝
花もむかしにかはらざりけり

菊の花おくしらつゆにかをそへて　諏訪　晴子
ちとせのいろも深く見えつゝ

朝日さへてりそひけりなしら菊の　大屋萬喜子
はなにやどれる今朝のしら露

朝ごとにつゆのしら玉おきそへて　植木　鋼子
うつるもしらぬ庭のしらぎく

はなの上に結べる露を其のまゝに　江馬　信子
　手折れむにほふにほのしら菊
千代かけてかはらぬ色の菊のはな　青木はる子
　おきそふ露も千代やかをらむ
久方のつきなき夜半もにほふかな　藥師寺芳子
　つゆの玉しくしらぎくのはな
白菊のにほふさかりはおくつゆも　太田　兼子
　はなに色香をそふるなりけり
咲きしより千代のためしと置露に　花岡　梅子
　ぬれていろそふにほの初ぎく
ふくかぜにこぼれやすらん初菊の　波岡しま子
　花にやどれるつゆのしらたま
うすくこく匂ひそめたる白ぎくの　相羽　政子
　色にうつろふつゆぞはかなき
薄くこく花のいろにやそまりけむ　加藤きみ子
　にほひことなるきくのあさ露
おきそめし露のうちより七重八重　藤田くら子
　千代もこもれる白ぎくのはな
朝な〳〵つゆおきそひて榮えゆく　島田　悦子
　まがきのきくの色ぞゆかしき
朝ごとに玉をつらねておくつゆの　青柳　茂子
　なさけをしるやしらぎくの花
みどりこき松のした露こぼれ來て　松田　靜枝
　千代のいろ添ふ白ぎくのはな
菊の上におきぬる露はすみわたる　松田いし子
　そらの河よりふりしなるらん
香をこめていよ〳〵白く見ゆる哉　宇多田やう
　つゆの玉しくしらぎくのはな
君が代の千年のきくにおきそへて　川口とは子
　つゆも老いせぬ色を見せけり
秋風もふきなちらしそつきかげを　橫田　淑子
　やどせる菊の花のうへのつゆ
置く露もいとゞはえある庭の面の　永易　幾野
　まがきの菊にあきをしまん
大君のめぐみもふかくおくつゆに　福岡多野子
　わが日の本のきくぞかをれる
つねにさへ見あかぬませの白菊は　小松田時子
　露おく今朝ぞわきてさやけし

しらぎくのはなにおきそふ朝露の　福岡　玉子
　玉ちらさじとをりぞわづらふ

露のまゝながめくらさん菊のはな　福岡　順子
　たまより清きひかりなりけり

積る雪に月うつろふとまがひけり　大亦　高子
　露をかざしのしらぎくのはな

散もうしちらねば花のうつろはん　船田　隆子
　吾が袖におけきくのしらつゆ

咲きにほふ黄菊白ぎくいろ〳〵に　横山きみ子
　おき渡したるにはのあさつゆ

つねよりもまさりがほなり長月の　廣田とめ子
　露さへかをる今朝のしらぎく

わかなくにながむる菊の花なれど　青柳いはほ
　鑑さへかをるこゝちこそすれ

おく露も星のひかりと見ゆるまで　山口　幾代
　垣根ににほふきぎくしらぎく

うつろはぬ色ぞめでたききくの露　河村かね子
　花のあるじは八千代へなまし

九月廿日兼題　暮秋山家

天　熊本縣山鹿郡千田村　廣東　しめ子

うき秋とこと〴〵しういひ渡りたれど今となりてはなごりをしくて道しらむたづねもゆかんときのふは野にゆきけふは山路にわけ入りぬ山川には風のしがらみかけそめてゆくての菊の花のやゝうつろひたるいとあはれなりやゝ奥深くたどりゆくに鳥の音も聞えぬほどの深山のおくの住居ありけりおのづからなる萩の花がきも此頃の嵐にやつれて夜床の下ちかき虫の恨と同じおもひに夜をあかすらんとおぼゆるにまして軒ちかき紅葉の心ありげに一本二本散りのこりたるは更に目覺るこゝちしてをかしきに鹿の鳴く音もまちかく聞ゆるなどとりあつめていひしらずをかしかゝる世はなれたる住家はいつとなく心すみてあはれなるものから猶此頃のけしきこそよろづしめやかにして秋のいぬらん道もかゝるところにやといとゆかしうおぼえしか

地

千葉縣佐倉町
宮小路町　植木鋼子

をのへに近き鹿の聲もきのふにけふは遠ざかりまがきの菊もいよ〳〵うつろひ行に木々の紅葉は梢むなしきまでぬさと手向てあすもや秋は門出しぬべきけしきにみゆるをいかにかせましうらかるゝ尾花は風にまかせて打招き虫は聲もかれ〴〵になきてとゞむれどしらずがほなるを我もしづけき柴の庵に世のうき秋をうしともしらず見る物きく物を友として心をなぐさめきつれどたまさかうき世の友に訪はれたる其別れにゝなか〳〵いやましあはれも深くしのびがたくてなん

人

長野縣上水内郡
長野町　勝家かをる

物の哀はといひけむ秋もふけゆくまゝに朝の露は淺茅が原の葉末の霜とおきかへ夕の霧は時雨もよほす浮雲と立ちかはりて吹きすさぶ風いたく身にしみ木々の梢もはかなげに散りゆきて谷の小川も色かはりゆき岩間をもる瀧の糸も紅にそまりぬれど萩の花つまにやどりしさをしかの聲も千草にやどれる虫の音などもよりどころなげにかれ〳〵てひとりすみのこれる有明の月の行へはいづくなるらむともの思ふ身にはそゞろによろづかこちいでられ暮れゆく秋のいとゞしく惜まれてこん冬をまつわびしさは片山里の庵になむ

佐々有鄰子

織がごとく鳴しきりつる虫のねはいつしかかれはてゝ柴のをり戸のこほろぎの聲も色つきし萩の下露ふきはらふ風の音もくれかゝる秋のあはれをそへて足引の山下いほの涙のたねとぞなりにけるげにわが身の上もかくあるべしと心ぼそくてなん

植木しい子

けちかき尾上を吹きおろす山風も身にしみて庭にちりそめたる紅葉をふみわくる鹿の聲のうちにや秋はくるらんとおもへど袖の上の露さへおきていとあはれになんかゝるをりは猶世のうきめみねぬ深山の奧のかくれ家に住みておもふ人のはだしなき身には今更かこつかたもなくてこの頃のうらみ

は一しほたへがたくこそ

新野尾喜起

里近くきこえしさを鹿の聲もやう〳〵に遠ざかり千草がくれに鳴きかこちたる虫の音も今はいつしかかれはてゝうつろひゆくまがきの菊の色そむる露ふきはらふ秋風に木々の梢もはかなげにもみぢしぐるゝ音の外に問ふ人もなき片山里のさびしさ夜寒の風にさそはれて暮れ行く秋のなごりもいとをしまれてそゞろによろづ思ひ出の種となりまして二葉三葉梢にのこるもみぢども名殘惜しげなる心地せられて山路深く行へさがさんもいと心ぼそくてなん

藤田くら子

秋風やう〳〵身にしみて雲のけしきもふけゆくまゝに山里のたゝずまひは一しほあはれもましてふもとよりはいとはやう冬めきわたりきり〴〵すの音さへわきてはげしき心地せらるゝもげに山のはの近ければなるべしやがて秋もふけぬるかすさがにすゞ虫の音もよわりてなく鹿のこゑいとゞしくかなしきなどよろづとりあつめたる淋しさにいもねられず例のひさしにいでゝ見れば横山のかひよりてらす月かげにそゞろ昔のしのばれてまたこん春にもがなとおもはゆるこそいと〳〵あさましかりしか

内藤よし子

土さくるてふ水無月もやう〳〵くれゆきてなごりの青葉茂りし山かげにきり立昇る秋の空もいつしか長月の頃となりぬれど日ごとにとりくる杣人の聲も鹿の鳴くにかとおもはるゝに枯野にすだく虫の音さへよわりがちなる折しも山ざとのげにやあるらん冬もまだきにおとろ〳〵しき村時雨に北風さへ吹きそはりて庭の木葉も名ごりなくちりはてなんとするさま例ながらいとたへがたくなむ

青柳　茂子

世の中のうきに変らふ都さへ木の葉かれゆく秋くれどよろづにつけ物がなしく思ゆるに殊さらしづが伏家には色香めでたき花もなく時を得がほの萩桔梗かどになまめく女郎花もすゞろにあはれをま

すむかり秋かぜわたる夕には妻こふる鹿の音のみにてすゝき尾花は招けども尾上に高き月をたよりに散りしく木の葉ふみわけて門のとたゝく人もなし

松田　静枝

松の嵐のやう〳〵はげしくうしとかこち淋しといひておもひすごせし秋もいつしかけふ明日となりぬ見渡せバいつあぢきなき風に誘はれけんこゝかしこ谷水に散りて浮べる紅葉の岩間〳〵によどめるは渡らむ錦中や絶えなんといへるむかしのおもはるゝに日西の山に落ちては虫の音の絶え〳〵なるに棹鹿の聲うら枯るゝなどあはれこよなう物悲し

宇多田楊子

月や紅葉とおくかれて秋の物のあはれの中にも何となく心のうさもやられ翌日とくらし今日と過ぎ移る月日は飛鳥川何日しか空の景色も打かはりけん浮雲さまよひ折〳〵時雨はだ寒く吹き來る風に木々の葉もはかなげに散り乱されて見る影もなし

訪ひ來る人の足もたえ垣根によわる虫の聲雲間を渡る雁がねや妻したへる棹鹿の暮行秋の感を添ふるなどげにあはれさもいやましてわが山住は淋しくもいと淋しくなん覺えける

大亦たか子

うしといひつらしとかこちしだに早暮るゝと思へど亦かなしくいとをしきは人の心の情になんあるをまいて月にも花にもへだてなくかたらひし秋もいづち行らん名ごりには只涙のみせまり來てとかう別れの言の葉もひとり居の山家の内あすは誰をか友垣にせましなど打かこたれてなん

船田　隆子

奥山に紅葉ふみ分け訪ふ人のなきいほにかくるゝ身の友としむつびなぐさむるは物のあはれをますといふ秋の情の心になもあるを無情の風に紅葉の苔の衣の上ぎぬと吹き散る秋の夕ぐれにはいはむ名殘の言の葉も涙にせかれてえいでぬを心つよくも行く秋は何をうらみてかいそぐらんあなかなしや

横山きみ子

いつしか秋もくれ竹のひとよふたよの名殘りとなりては袖も袂も時雨がちにてかわくひまさへなく鹿の聲のあはれもいとふかき山里計りうきものはあらずなん

廣田とめ子

山里に打なびきぬる夕部のけむりもやがて時雨の雲と立かはるらん松吹風もひとしく身にしみ枯草に鳴よわりたる虫の聲もとだえがちなるにおもひつゞくれバ昔の人のなげきけん秋のゆふ窓の氣色むかしかなしきはあらじなど打ながめやりぬる峯の古寺の鐘の聲風に吹めぐりて聞ゑくるなどいといと身にしみておぼえけれど

峯つたひゆふべにひゞく鐘のねは
くれ行く秋をなごりなるらん

青柳いはほ

秋の日も殘り少くなるまゝに野山の景色もはや野分のかぜに吹ふせられ物みないとあはれなり山里は殊更に田のもの稻もいろ付きてかりとる賤の女が姿さへいとさびし木々の梢に花を見し春のけしきも早紅葉に色かはり虫などの鳴よわりぬる音かなしからぬかはとりどりあはれに打見やりけるをりしも一つらなきて來にけるは稻かりたるあとに今宵のやどやしむらんあはれにめもすみぬれバ明ぼのを待てそが宿を立ゆかんを今よりまつもいとゆかしきや

十月兼題

五日　歌……閑庭落葉
　　　文……時雨ふる日人の許にやる文

廿日　歌……名所千鳥
　　　文……和歌の論

貴金属煙管

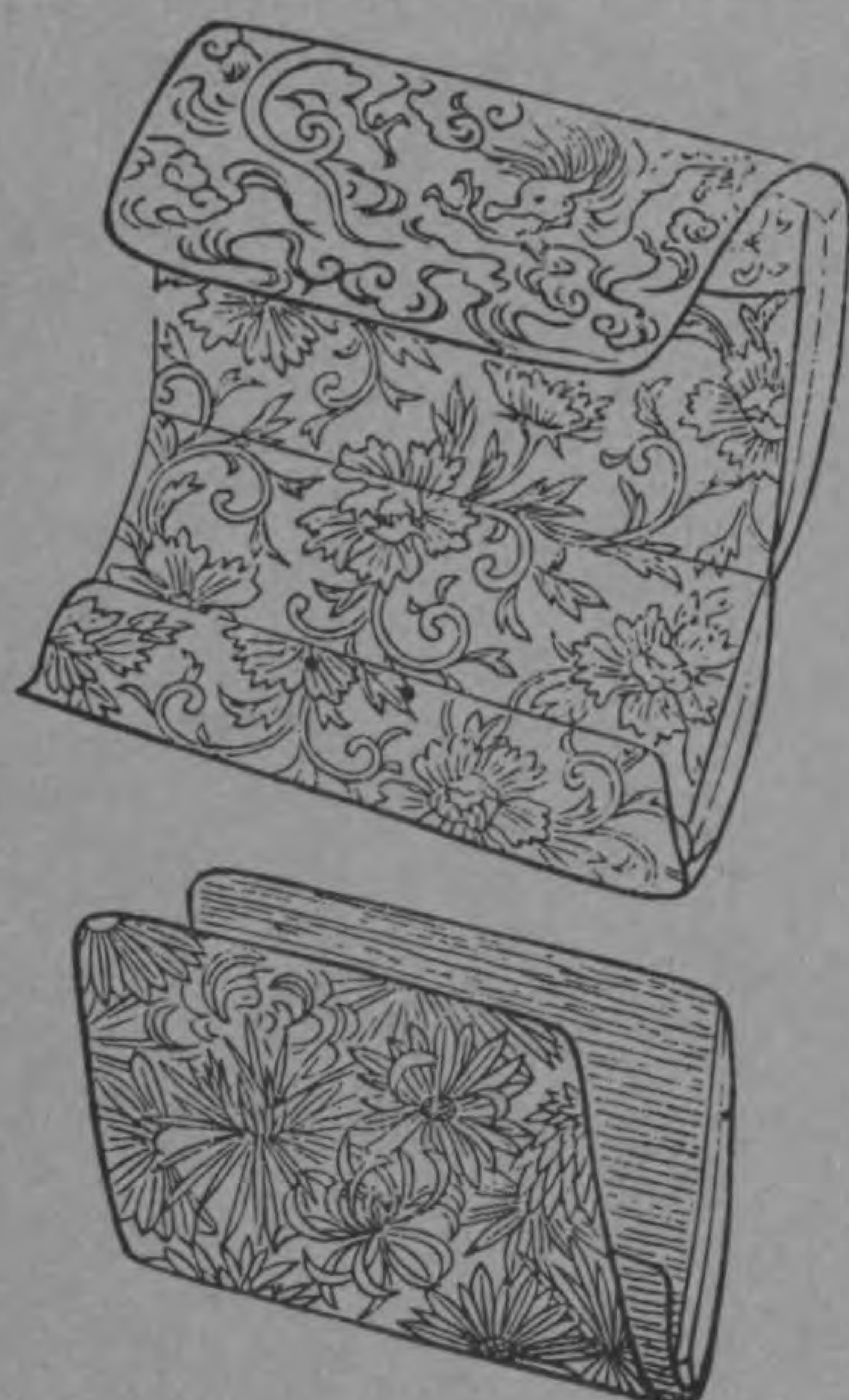
金銀製　金銀張分製
朧銀　赤銅　鋼鉄製
各種

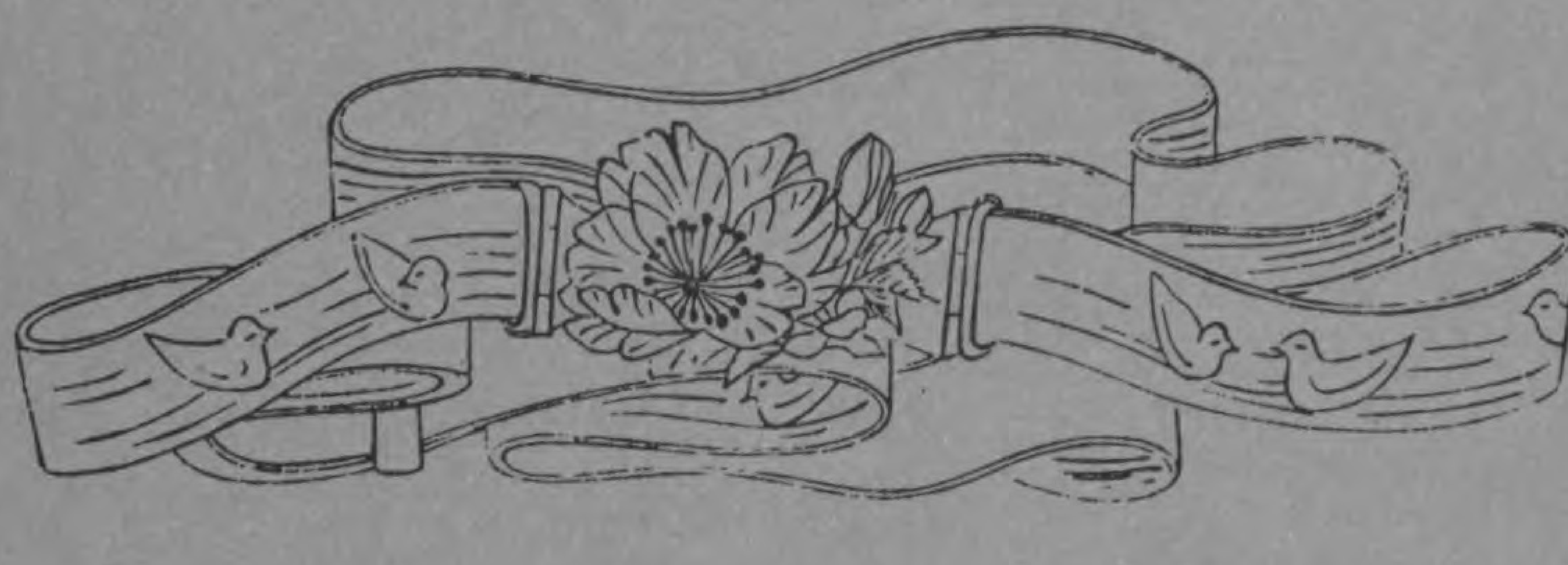
煙管筒

象牙　鹿角　木竹類
諸名家　彫刻
各種

懐中紙入

刺繍　古代切　鰐革
縮華　変革其他切製
各種





貴婦人用帯留
金銀赤銅
朧銀製金物　各種
絹手織紐
諸名家彫刻
其外袋物携帯
品は洩なく好みに應じ
調進仕候

東京市京橋区尾張町
二丁目八番地
袋物商伊勢新
尚地方へは見本次第送
荷仕候

女鑑第四拾六號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕
〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通逕にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿六年九月十九日印刷
同　年同月二十日發行

發行兼印刷人　東京麴町區平川町五丁目十六番地　川崎直衛
編輯人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　山根勇藏
發行所　同　國光社

(赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行)